385.8
Ka25

大分史談會叢書第一卷

府内藩年中行事

同會發行

2

0054222000

0054222-000

３８５．８－Ｋａ２５ウ

府内藩年中行事

垣本言雄・著

大分史談会

昭和１８

AIC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

335.8
KA25
46

大分史談會
叢書第一卷

府内藩年中行事

全

大分史談會叢書發刊に當りて

大分史談會代表者　幹事　三重野幸夫

世の中に、タゞの一部しか殘つて居ないといふ樣な貴重な文献書籍が諸方に秘藏されて居る、これらを、セメて五十部でも百部でも再刊して世に殘し、萬一の場合にも備へると共に、研究家たちの便宜に供へ、進んで我文化の爲め、職域に依る貢献を爲すといふ事は、我等本來の最も重要なる事業の一であり使命である、我々は本會を創設した當初より、夙に此重要性には着眼して居たが、爾來今日まで焦慮しながら、荏苒時を遷し遂に今日に及んだものであつた。

然るに、今茲に有志各位の協力を得て漸く多年の念願叶ひ、第一冊を世に贈るに至つた事を、自他共に頗る欣快とする處である。

第一冊は題して「府内藩年中行事」といひ、順次續刊するものを纒めて「大分史談會叢書」と呼ぶ事にした。

時は維れ昭和十八年三月、折柄時局は大東亜戰爭のまつたゞ中で、正に本年こそは大決戰の年だといはれて居る、而かして一方これが爲め、戰時重要物資の一たる出版物に於ても、異常なる決戰体制下に置かれ、出版事業界に於ては自然極度の緊張を制約されて居る現狀だ。

此嚴肅なる、而かも緊迫せる戰時事情下に於て、幾多の難関を排して起ち上り、多年要望して止まなかつた本事業を、決然として斷行するに至つた壯図は、認めていたゞかなくてはならない。

然らば之れが出版理由如何

大日本精神が高揚さるればさるゝ程、大日本帝國建國三千年の英姿聖相を熟知する爲めに、之れが光榮ある「歴史」てふものが、究められなくてはならない事はいふまでもない、それと同時にこれが根本資料たる文献、殊に其稀書珍籍が再刻され世に贈らるゝといふ事は頗る緊要の事に屬し、否事茲に至りては、獨り專門家、研究家のみの世界に非らずして、之れを端的にいへば世を擧げての聖業たる可きもの也と斷じて憚らないものである、即ち本事業はこの大理念に基き開始され、今業に其第一歩を踏み出したのである。即ちこれ此難局を押し切つて、決行せざるを得なかつた所以である。

たゞ前記の如く、止むを得ざる國家事情の爲め、發刊部数に於て、必要なる要望の何分の一しか充されない苦しき出版事情を如何せむ、これは我慢していたゞき、せめてこれだけでも世に贈り得たことを若干の御奉公として諦らめて貰ふより外はない。

これよりあらゆる困難を克服して「貴重なる且必要なる古典の類」を再刻順次發刊致すので此上とも各方面の御協力御賛助を希はざるを得ない、尤も、時には我等の研究録等を插入する事もあるであらう。

以上叢書發刊の第一聲として發刊事情趣旨を簡單に記すと爾云。

（昭和十八、三、陸軍記念日當日紙魚庵文庫にて）

府内藩年中行事刊行附言

一、本書は舊府内藩（現大分）に於ける年中諸般の行事を詳細に記した貴重文献の一つであります。

二、本書は文久三年現在に依り、當時の藩主大給氏の御用所に於て制定したものであるが、尚ほ明治維新に至る迄漸次改訂を加へ實行し來たので、凡そ舊府内藩に関する年中行事を知らうとする人の參考資料として特に御一讀をお勧めする次第であります。

三、総て藩制時代の行事は極めて嚴肅な格式の下に執行せられたので、現代から之れを窺ふと餘りにも儀式張つたやうに見えるが、それが又武士道的精神の表現とも云ふべきものであり、然かも日本が未だ外來思潮に染まぬ以前の純眞な姿を見るべき唯一の資料として再吟味すべき價値があるものと信ずるのであります。

四、本書原本は大分縣立大分図書館所藏本ニ據り謄寫したもので原文其の儘のであります。

昭和十八年三月十日

編者　垣本言雄　識す

府内藩年中行事

正月

朔日

一

一一 朝御膳前當番之同役罷出御機嫌相伺御膳相濟候上非番之同役御機嫌相伺之。

一一 御熨斗目麻上下被爲召御逢之間江出御、御城代年寄中年始之御禮被申上、御喰摘頂戴。畢而同役共申上御喰摘頂戴。右相濟、御小姓頭、御醫師共御禮申上。夫々大書院江出御、御通掛御目見浪人御近習番御祐筆（朱書）西川道友御臺所目付御茶道御目見申上之。但西川道友御扶持方斗被下置候節之例

御臺所目付ハ、奉行ニ而モ同断。御茶道御目見格ニ而も同所江罷出御目見申上之。

（一）當番者毎朝御揃濟御逢之節御出有無相伺候規定）（付箋）

（一）（朱書）當朝五ツ時頃、日蝕等之節、六ツ半時揃。余准之。（付箋）

一（朱）天保十五年ゟ御番醫安藤春臺、山田朝庵、小野昌庵、御茶道次席ニ而、御目見申上、御喰摘頂戴。

一（朱）嘉永二酉年ゟ左之面々大次醫師被仰付候付疊廊下江居並、御目見申上、午御喰摘頂戴、給仕、坊主。

山田朝庵　板井玄養　小野昌庵　神屋三折

一大書院御安座之上、年寄中着座、御家中之面々御禮申上御喰摘頂戴之。御給仕御中小姓三人、御三寶三ツ御前江茂壱ツ差出。御家中之面々御喰摘頂戴相濟候之上、切符之面々三人組ニ而、罷出御禮申上之御喰摘頂戴。順道之通。尤給仕御中小姓五人御禮前申付之。

御中小姓、御代官。御目付。御徒士。御中間頭。御大工頭。御持小頭。四組小頭。御籏小頭。御用人書役。御勘定所手代。御目見格。御玄関番。御船頭。押御目付兩人。

但　右獨禮之處、観光院様御代ゟ三人組ニ而罷出御禮申上之。御中小姓相濟御代官以下三寶少シ下ゲ候様相成。

(御目見順、御中小姓、御代官、諸御目付、御徒士(但近年御船頭御徒士格々被仰付被下罷出ル)中間頭、大工頭、御持小頭、四組小頭、籏小頭、御用人書役、惣御役所手代。)(付箋)

(御目見格、御玄関番、押目付兩人。)(付箋)

(年寄中、大書院着座、御家老之面々居並候上、出御。夫ゟ御禮申上、御喰摘頂戴、認直事。(付箋)

(御中小姓、御給仕名前御礼前取調上御着之上御三方御前江差出候、被下御三方差出候事。(付箋)

一右相濟當番之同役大書院入口ゟ御礼相濟候段申上之。直ニ入御。

一御禮過淨安寺御参詣之事。

一御小姓頭、大目付、御醫師、同役共於席御喰摘頂戴。給仕坊主。

一同役共御側者頭兼帯被仰付候付、寛政十三酉年正月元日ゟ非番之同役申合、大書院へ出座。

一明後三日、御家中切符之面々迄、射初可被成御覧旨被仰出、今日廻状差出。文言左之通。

口上之覚

962
46

舊臘申達候各射初、明三日於大書院御庭可被成御覧旨御意御座候。五ツ時御揃可被成候。若御痛之方茂御座候ハヾ御名前之下江御記、廻状早々御順達廻リ上ゟ今七ツ時迄拙者方江御差戻可被成候。以上。

正月朔日　戸田三之丞

御城代
列座　殿書之。
御家中

如斯當番之同役一名ニ而差出之。

御意廻状ニ付如斯。御留守中ハ、様書相認候處、寛政十三酉年十二月ゟ御家中江者、年寄中ゟ被相達、御在城之節ハ還迄之通。

口上之覚

舊臘申達候各射初明後三日於大書院御庭可被成御覧之旨御意ニ候、五ツ時御揃可有之候。若痛之方茂有之候者名前之下江御記廻状早々御順達、廻リ止ゟ今七ツ時迄拙者方江御差戻可有之候

以上。

正月朔日　戸田三之丞

御小姓頭　殿書也

御小姓江茂

御小姓頭江者、苗字名如斯。
御小姓斗ニ候得者苗字不書。

但　列座格、或ハ御者頭格御勉奉行格等之御小姓頭加リ候得者、文書御給人之通。

文言右同断。

三之丞

御近習番、
御右筆　殿書也

文言右同断。
御中小姓　殿書也

口上之覺

舊臘申達候御手前方射初明後三日於大書院御座可成御覧旨御意ニ候。五ツ時可被相揃候。若痛之方も有之候ハヾ名前之下江御記、廻状早々御順達、廻リ止ゟ今七ツ時迄拙者方へ可被差戻候。

已上。

正月朔日
御代官
御臺所目付　殿書也
御目付　但御意廻状ニ付殿書也。
御徒士

右廻状列座御家中始、何れ茂罷出候者ハ名前之下江奉与認不罷出者ハ痛御座候与認引込ミ者ハ引込罷在候与認。

一右射初之儀、御目見浪人江者大目付ゟ被相達候様申達之。當時ハ年寄中ゟ被相達之。

一御持之者射初立附之儀小頭江申渡之。且又御目見格之者名前書出候様御目付江申渡之。

御勘定所手代者御勘定奉行江相達。

但　御目見格之者射初罷出候様是又小頭江申渡之

一的場掃除之儀、御普請方御目付江申付之。

一矢取中間之儀、例之通差出候様、中間頭江申渡之。

右朱書之分、年内被仰付候得者、今日不及沙汰。

一右射初廻状御留守中者左之通。

口上之覺

舊臘申達候通明後三日各申合於普古場射初有之可然存候。尤四ツ時御揃可有之候。若痛之方茂有之候者名前之下江御記廻状早々御順達廻リ止ゟ今七ツ時迄拙者方江御差戻可有之候。以上。

正月朔日　月番之同役一名
御小姓頭　殿書也
御小姓江茂

但列座格御者頭格御鎗奉行格御小姓頭之節ハ、文言各御申合御揃被成候御痛之方御差戻被成候。

文言右同断。
御近習番
御右筆　殿書也

文言右同断。
御中小姓　殿書也

口上之覺

舊臘申達候通明後三日御手前方申合於普古場射初有之可然候。尤四ツ時可被相揃候。若痛之方

候有之候者、名前之下江御記置候様可申達之。近來年寄中ゟ被相達。

正月 朔日

御代官
御書所日付一 殿書也
御同付
御徒士

一(来)御目見浪人名前之儀、大目付へ相達之。近來年寄中ゟ被相達。
但以前御留守中御家中二男三男御近習若御中小姓御徒士忰罷出候得共寛政十午年ゟ御在城年之通御目見浪人迄二而相止。

一御目見格之者名前書差出候様御目付江申渡。御持之者立附并矢見御持之儀、小頭江申渡之。的場掃除之儀、御普請目付へ申渡。矢取中間之儀、中間頭江申渡之。

一(来)「今朝當番之同役御殘被下之。
但元日ゟ五ヶ日之間、當番江御殘并五節句、一汁三菜御殘被下候處、近來相止。御吸物着二種二相成。然處文化二丑年ゟ悪敷御取縮被仰出御吸物相止、着二種斗之處、同年九月ゟ又々相減。」獻斗差出之。尤年始ハ吸物一ツ着二種被下之處、近來相止

一明朝御禮刻限之儀、相伺候上、年寄中へ申達、御小姓頭江ハ例刻御禮被爲請候旨申達之。

一(来)明二日ゟ町郷中御禮被爲請候二付、廊下橋張番所江御目付出役之儀、召呼申渡之。

一右二付立番足輕兩人、御番頭江申達之。

以手紙令告上候。明二日ゟ町郷中御禮被爲受候間、例年之通廊下橋張番所立番足輕兩人罷出候様御申付可被成候。此段得御意候。以上。

正月 朔日

但右之儀、十二月廿八日申達置候得ハ、此節不及申達。

立番足輕之儀、御目付ゟ不申立。此方ゟ直二御番頭江申達事。

右之通、近來年内申達置相成候二付朱書致置之。

一日田、長崎江年始二付、御書被差遣候二付同日申達置之。明朝出立、今日小頭召呼御書相渡之。近來年内廿八日二渡置之。

一飛脚足輕之儀者年内月番頭江申達之。

改年之吉兆不可有休期候。彌無御別條可爲御越年珍重存候。然者就年始左衛門尉ゟ其御那代様江飛脚足輕被差立候二付、例年之通適宜御世話頼入存候。右可申述如斯御座候。恐々謹言。

同役連名 在判

正月

廣瀬源兵衛様

但白木狀箱、油瓶包上書跡書不及。

同文言二而左衛門尉殿ゟ其御奉行様江ゟ相認。其外無等儀。

豊後屋理右衛門様

但上包、日田与同断。

一御留守中、日田、長崎自分狀斗、飛脚之儀八、年寄中ゟ被申付。

(来)但、自分狀斗一通り番役狀箱二入油紙書添掛、年内廿九日番役ゟ年寄中番役江相廻置事。

一御留守中、年始御礼月番之年寄歟、於宅被請之。

一今朝淨安寺御参詣之節ハ、法性院様御豊前御代拝同役共相勤之。毎月とも御代拝同役相勤候事。

一(朱)勝壽院様御豊前、御隠居様御代拝同役共相勤之。毎月とも御代拝同役相勤候事。

但、勝壽院様御代拝者、天保十一年子三月大御隠居様御逝去ニ付相止ル事。

二日

一今朝六ツ半時揃ニ而御城下町人共并醫師、庄屋、宿老、組頭共迄御禮被為受之。尤御町奉行名前書付持参。右御禮罷出候者共御門繰込之儀、廊下橋御給人番所江手紙を以申遣繰込相濟。口上申上之。大書院江出御。

但、御目付を以申遣候節ハ、手紙ニ不及。

以手紙令啓上候、御禮罷出候者共、只今御門繰込之儀御申付可被成候。以上。

正月二日

上書　切符。

廊下橋　御當番中　當番名

但、雨天之節、御玄関前江足洗盥差出候様、御臺所江及沙汰候事。

御内禮御言葉被下候町人共左之通、扇子箱献上、同役共交々被露。

○米屋町　次郎兵衛　○櫻町　八右衛門　○塗師町　喜兵衛　○米屋町　與七郎

○堀川町　平右衛門　○笠和町　孫右衛門　○上紺屋町　新四郎　○革屋町　勘左衛門

○革屋町　善兵衛　○西新町　青右衛門

惣宿老格　幸松平右衛門、佐藤次郎右衛門。

右兩人者惣宿老格何之何某ト致披露事。」

但、御内用達御内禮被仰付候者、委細書付ハ其節々御町奉行ゟ差出。尤(朱)京都亀屋喜右衛門下リ合候得者御内禮之筆頭ニ相成候事。」

○印之町人御内禮之處近頃表御禮相成候得共、御内禮之節、御意有之向故表相成候而も御意有之。

右相濟表出御、獨禮貳本入扇子箱献上、披露同断。

(朱)山田長庵　三原玄育　中原玄杏　武田見良　牧祐節」

但、御番醫被仰付候者共委細右同断。

一(朱)惣宿老高屋嘉兵衛、同後見芦刈万右衛門兩人者、御言葉被下。」

右相濟、東五个村、西三个村之庄屋共御椽側ニ而御禮申上之。東五个村之庄屋共扇子箱三ツ、西三个村同貳ツ。

右相濟宿老東組一同之御禮申上之。御城下生石、駄原、勢家町人、東五个村醫師組頭共与披露。

但、表一同御禮之内、近來庄屋共悴茂罷出候ニ付庄屋悴共与披露。

一今日年始御便差立。

一年始恐悦状、御在城之節、左之通差立之。

新春之御慶不可有盡期御座候。御隠居様益々御機嫌克被遊御超歳奉恐悦候。此段御序之刻、宜御執成奉願候。恐惶謹言。

正月二日　同役連名在判

御附同役様　人々御中

(55) 若殿様被成御座候得者、同文言。

表同役様　人々御中

新春之御慶不可有盡期御座候。職三郎様益御安泰被成御超歳乍憚目出度奉存候。此段御序之刻宜被御上可被下候。奉願候。恐惶謹言。

正月二日

表同役様

但、御二男様是迄乍憚目出度御儀与相認候處、享和元酉年五月廿日ゟ「御儀」之文字相除「忝仕合」与相認候處、「難有」与相認候様相究。

新春之御慶不可盡期御座候。殿様奉始両表　上々様益御機嫌克被成御超歳奉恐悦候。此段爲可得御意如斯御座候。恐惶謹言。

正月二日

年寄中様　一通

同役中様　一通

但、以前格状遣候所相止。

尚々くれ〳〵もよろしく御取なし下さるべくたのミ入ゟめでたくゟしこ。

初はるの御しうぎ何かたもおなじ御事こいはひおさめ参らせけ。

大奥様ます〳〵御機嫌よく御超歳遊され、恐悦にぞんじ奉りけ。年始の御祝詞申上たく、其もと様までかくのごとくに御ざけ。此よし御序のふしへよろしく御執成御申あげ下さるべくたのみ入ゟけ。目出度かしこ。

繁岡　ゟ　人々申給へ

太田様

奥様江　文言同断

お八百　ゟ　人々申給へ

御在府中、

新春之御慶不可有盡期御座候。殿様益御機嫌克被遊御超歳奉恐悦候。此段御序之刻、宜御執成奉頼候。恐惶謹言。

正月二日

同役様　人々御中

右之外無替儀。右披露状遣候へ者、同役江別段格状差遣。

御一家様方江披露状左之通。

新春之御吉慶不可有盡期御座候。和泉守様益御機嫌能被成御超歳恐悦候。年始御祝詞爲可申上各様迄若是御座候。此段御序之刻、宜御執成奉頼候。恐惶謹言。

正月二日

き戸孫九郎
おゝ田弾ぜう
つく井嘉すけ
たま置内き
と田三のせう

様　人々御中

但、御用人宛、御二人切紙認置。

右和泉守様御在中之節者仕置様之義、御老中ニ而悉之御吟味有之候間、御老中ニ而悉之節、新春之御吉慶不可有盡期候。石見守様御在中ニ而悉之節、御老中ニ而悉之御吟味有之候間、御老中ニ而悉之節、申上候様立如斯御座候。此段、御序之刻宜御執成奉願候。恐惶謹言。

正月二日

様　人々御中

右大杉原ニ認其外御一家様方、文言相替儀無之。

一御未家様方左之通。

改年之御慶不可有盡期候。弐部少輔様益御勇健被成御超歳乍憚目出度御儀奉存候。年始御祝詞申上度各迄如斯候。此段宜御執成頼入存候。恐々謹言。

正月二日

殿

殿

右之外志摩守様、仁右衛門様、邦太郎様、文言相替儀無之。

但西丸御側被衆仰候得共文言替儀なし。

一御直書到来之節、御請文言。

一筆令啓上候。弐部少輔様益御勇健被成御座乍憚目出度御儀奉存候。然者就何々被成下御直書尊仕合奉存候。右御請申上度、各迄如斯候。此段宜頼入存候。恐々謹言。

月　日

一明日射初罷出候者當番相當候付、御番引罷出候之旨伺出候之者伺出候得者御番引罷出候様相達事。但御留守中ニ而も同断。

但、満服ニ而罷出初而當番ニ相當候而も右同断。弘化二乙巳正月ニ有之。

一明朝郷中大小之庄屋共御禮例刻可被為請故相伺候事。

御留守中

一今日年始恐悦状於月番宅同役書合致判形候事。先格也。

但、當時者六日ニ寄合、麻上下着用、御在城中者六日仕廻麻上下ニ而登城。

三　日

一今日諸中大小庄屋共六ツ半時揃ニ而御禮被為請候事。

一大庄屋共御禮左之通献上、何れも弐本扇子箱、同役共交々披露。

下市村大庄屋　二宮　善右衛門

野畑村大庄屋　岩田　庄右衛門

衆鉾村大庄屋　加藤　祐右衛門

上村大庄屋　三宮　仁兵衛

蛇口村大庄屋　三重野　又右衛門

内成村大庄屋　加藤　米右衛門

橋爪村大庄屋　田北　弥五右衛門

加来村大庄屋　阿部　源五右衛門

古閑村大庄屋　高屋　三郎右衛門

平良石村同　格　麻生　卯右衛門

此外大庄屋格等被仰付御禮被仰付候者共委細書付郡奉行ゟ差出。

一右相済小庄共一同之御禮被受之。献上山芋拾把、午蒡拾把、玉子百、同役共披露御領内小庄屋共ゟ被献。但、近来大庄屋幷共、一同御目見有之。大庄屋共ゟ披露。

右相済直ニ入御。

一 御規矩相清大番頭御陣子取揚揚除出来之上、申上御相談御持筒頭為召出御直規矩始候段申上候而御様側ニ罷出規矩始候様申達。順々射始有之立附書役之者相認出来之上、御前江差通、年寄中一通大目付へ一通、同役一通。但、中り付有者書役之者一人、扨有共遠後之方へ罷出相記候事。

一 嘉永二酉年射初罷出候者百拾七人有之、相伺候上、射揚之節、尤射揚之旨大目付ゟ申達ハ様及沙汰候事。

一 立附順左之通。

御家老嫡子、列座中嫡子御用人嫡子親々之席順ニ而御小姓之跡ニ加リ罷出。尤部屋住之節也。
御留守中御小姓無之節者、御家老中之次、御近習番ノ上。

鳥金一立

壹

御小姓頭
御小姓
御家老嫡子
列座
御用人嫡子
者頭
御家中
御近習番
御中小姓
御目見浪人

御目見浪人名前者大目付ゟ年寄中へ差出、前日

六 御代官
七 御目付
八 御目付
大的一立 御持小頭
御徒士
御目見格

年寄中ゟ此方共へ相廻。

以上

右認方掌頭之順を以ヲチサシニ置。

右罷出候當日痛之者ハ立附之名前へ黙掛。御前其外差出。猶又痛所全快之者茂有之節最早立附調出来ニ付不及罷出。近年之例ニ候處尚又享和三癸亥年正月三日表方為心得大目付清大夫江相達。尤痛所快候ハヾ前日全快ニ付射初罷出候段相届候之様同人江相達之。

（文久三癸亥年正月6御変事、、格々一両輩も素前仕ル様相成。尤人當於席聞取之上、師範へ相達大目付へも相達之）

（素前名前之儀、射初遣初之節ハ師範江相渡ルニハ不及申聞候哉ニ被遊ル。大目付ゟ相達ル而可然筋ゟ被存候）

一 射初相済、入御。當番之同役射場溜江罷越何れも射初之節致承矢候者江弦三筋御目録被下之。尤御目付以上ハ於御前被下之。當番披露御徒士御目見格者於席申渡之。弦三筋代銀貳匁五分也。

但、御徒士ハ御徒士頭一同、御持小頭ハ一人、其外御目見格ハ御目付一同。

但、御持之者ハ御留守中大的一立、鳥金一立。尤鳥金之方先也。

、文久三癸亥年ゟ剛隊一片被下被相成。（後筆）

一御目見浪人永矢・付弦御目録被下右例無之ニ付文化四丁卯年正月三日桑原多仲忰要吉永矢之節年寄中へも判頼之上、御前江伝申上、弦三筋御目録被下候段御意之趣、親多仲一同於席申渡之。

御留守中射初。

一寄合御座相済、稽古場へ罷越、右之頃ニ而射初有之。尤坊主一人煙草盆、野風呂差出候様、御臺所

一御持之者厚意念致承矢候得者、弦貳筋被下之候段小頭江申渡之。目録書役認之。

一右相済次第御家中、其外江御祝儀相済候者、江府江可申上之旨及挨拶候事。

一右相済、取候節御持小頭并御持之者共、稽古場入口之内江罷出其節一通挨拶之事。

一右射初之節年寄中御用有之節出席無之立附江府差立之事。

御留守中

一今日御天守御鏡餅差出候得者御使之節、江戸差立候事。

一明後五日御家中并御小姓迄鏡餅被成御覧者被仰出候付廻状差出、諸方射初之節、廻状之文言也。御同見浪人江者大目付ゟ被致通達候様。但、近来年寄中ゟ被相達之。

御留守中通兵法日限達。

一御留守中年寄中ゟ御小姓頭ゟ以下、廻状御留守中射初廻状之。

文御臺以御中小姓迄差出之。御目見江浪人江ハ年寄中ゟ大目付へ被相達之。

一今夜御松囃子被仰付候ニ付、御城代年寄中列座同役共列座被御小姓頭御醫師ども見物被仰付候段存意之趣年寄中御城代列座列座格中へ者彼方席へ罷越申達。御小姓頭御醫師江者召呼申達之。

但、弘化五午年ゟ廣瀬久兵衛儀見物被仰付候段御吟味役を以相達之。

一右拝見之面々御吸物被下候間用意候様御臺所ゟ目付江申渡之。

一右御松囃子ニ付町人共夕七ツ時ゟ罷出候ニ付廊下橋江左之通手紙差遣。

以手紙令啓上候。今夕松囃子ニ付御城下町人共夕方ゟ罷出候間御門御通可被成候。以上。

正　月　三　日

上書例之通故畧之。

一御囃子罷出候町人共、給仕御手廻り之者差出候様御供目付へ申付之。

一（朱）「町人共江御松囃子被仰付候儀ハ、年内前廣御町奉行へ申達置事。

一御松囃子番組御書方ニ而相認候事」但近来御町奉行ゟ差出候番組直ニ御覧別段御裏筆ニ認不申付事。

一夕七ツ時御城代年寄中始拝見之面々登城。

一町人共登城之上、拙者共席向江屏風ニ而立切取調出来之上申上之。表御居間江出御御召替有之御城代年寄中列座同役共御逢有之、両側江罷出相揃候上、直ニ初候段申上、其上ニ而出御御囃始相済候上、一應御居間江入御御城代年寄中列座同役共列座格迄御次ニ引取。

一年寄中御城代列座中同役共列座格廣瀬久兵衛一人宛御前へ罷出御盃頂戴相済候上、一同罷出御禮申上之。（朱）尤御吸物御相伴可被仰付候得共寒氣之時分ニ候間御次ニ而綾々頂戴可仕旨被仰付候段、夫々江申達年寄中席ニ而何れも頂戴、御給仕御徒士。尤御相伴之姿ニ而年寄中席ニ而頂戴。故御小姓頭御醫師同席無之御出期ニ而頂戴。」

（此所御廃相成候得共手續之儀近年之処相談之上相認置度、追々以前通被仰出候節之見合相成可申被存候。）（付箋）

但、御盃頂戴之節御給仕御醫師申合相勤候樣申渡。尤右之趣申上之。古格者御相伴之儀故御醫師共不罷出候由年始御歸城御祝儀之節ハ御次ニ而頂戴故御盃之節御醫師罷出都而御相伴ニ而御盃被下候節ハ御醫師不罷出。

一右御吸物御相伴之儀御時節柄ニ而相止候處嘉永二酉正月ゟ御相伴之儀相始、給仕御小姓也。

但、御小姓頭、御醫師者御雜子相濟候上、御書部屋ニ而頂戴也。

一明四日御馬御乘初ニ付、廊下橋御番所江御出之旨、案内手紙前日差遣事。

一明四日御馬被遊御乘初候段被仰出候ニ付御馬役江其旨申渡之。

但、出御有之候得者煙草盆不及用意。若出御無之節ハ差遣候樣申付候事。尤御在府中者右之通差遣候樣申付之。

一御乘初之儀、御中小姓猶又草リ取之儀御目付江申達候事。

一明朝御城下御中寺社御礼刻限伺之事。

一御雜子相濟候上、町代官一同席江召礼候ニ付御雜子宜出來御滿足思召候段申渡之。

四日

一今朝御城下御中寺社、山伏御禮被爲受之。但、御門繰込例之通。

御内禮御言葉被下候分左之通御用人披露。

淨安寺　福壽院　淨土寺　來迎寺　神宮寺

右相濟表出御、御言葉被下候分。

圓壽寺　大智寺　萬壽寺　本光寺　常明寺

光西寺（基本）　願　但、本願者以前御言葉被下有之候處、少々不調法有之候故、其後相止。

此外獨禮之社寺、山伏委細其節々町奉行、郡奉行ゟ書付差出。

一光西寺罷出候得者御家老席襖際江屏風引廻席相拵候樣坊主へ可申付旨猶又茶煙草盆差出候樣御臺所目付へ申付屏風双差出候樣、大納戸江及沙汰候事。但光西寺継目之御禮、文政十一丑四月十五日有之。嘉永五子八月二日継目之御禮。

一右相濟一同之御禮被爲受之。御領内出家、社人、山伏共与披露。寺院都而継目之御禮有之節ハ一同御禮之者も獨禮。

一明朝由原一山御禮刻限伺之事。

一右相濟於東高場御乘初。尤御玄関ゟ直ニ御馬被爲召御家中百五十石以上、馬持面々乘被遊御覧、尤御家中へ者前日年寄中ゟ被申渡、御馬役書付指出。

五日

一今朝由原一山御禮被爲受之。但、御門繰込例之通。御言葉被下、同役披露。

金藏院　大宮司

但、金藏院當時護國之院寶御願ニ付、則護國院与披露。

獨禮　香林坊

一右相濟一同之御禮由原一山社僧、社人共与披露。畢而熊群山一同之御禮相濟入御。

一御禮後、御家中并御中小姓御目見浪人迄於大書院鎗兵法遣初被成御覧切。但、書付ハ射初之順御流茂一番也。

兵法御流茂

御小姓頭

御小姓」
御城代」
御家中」
御近習番」
御中小姓」
御目見浪人」
列座、同役、列座格、

直指流　罷出候順、前之通。

鐘御流　同断。

鏡智院　同断。

一右遣初相濟候上、申上之溜之間御襖左右ニ開、殿様御進出遣初罷出候面々江御意有之。

御留守中、

一右之順ニ而於警古場遣初有之。年寄中拙者共罷越諸事射初之通。

六日

一年越ニ付諸番所、夕登城之面々麻上下着用。

一(朱)明七日淨安寺御参詣ニ付御供觸申渡。

御小姓頭　御中小姓　御供目付。

右ニ付淨安寺江左之通手紙差遣。

以手紙致啓上候。明七日例刻其御寺へ被成御参詣候旨被仰出候。右御案内可得御意如此御座候。

以上。

正月六日

上書切符　淨安寺

一今日年始御便御差出ニ付麻上下ニ而登城。但、歳暮御便一所也。尤年始裏附状ニ日附、餘者今日付也。

一江府年寄中へ一通年始ニ付御用状差遣候事。

御留守中

一於月番宅寄合致判談麻上下着用。

七日

一今日七種ニ付終日麻上下着用。

一(朱)今朝例刻淨安寺御参詣艮刻歸御、御供觸昨日申渡之。

一右御参詣御延引之節ハ、昨日申達候面々召呼、淨安寺へ御延引之旨手紙を以申遣。

以手紙致啓上候。今日其御寺へ被成御参詣候旨被仰出候所、少々御不快被成御座候ニ付被成御延引候。此段可得御意如斯御座候。以上。

正月七日

(已前者御初便御祝義ニ付廉酒差出來候得者、中興相止、熨斗差出之。)(付箋)

八日

一今日御簇差初メ有之ニ付、御簇奉行ゟ中半一人前以申立有之候節、中間頭へ申付之。尤手紙ニ而申

遣候へ者左之通
來ル何日御饗差初ニ付雑ゟ中半一人江申立候間可被差出候。
正　月
中間頭　殿書
一來ル廿六日ゟ宗門御改罷出候ニ付表門奉行へ年寄中ゟ被申付。畢而年寄中ゟ沙汰之上、御目付一人出役之儀申渡。尤申上候上ニ而申付之。
但、御目付御人少々ニ而勘之者被遣候節ハ御徒士頭一同宗門御改御目付代江仰付候段申渡。且又鄰中御改相済御家中又者改之節者然御目付一人申付候事。
一右ニ付繪箱持中間貳人并奉行御目付供人申立有之候ニ付中間頭江申付之。(朱)猶又馬具人足等之儀書付を以申出候ニ付下知印押返却之事。
一茅高書付山奉行差出候ニ付、御用之分引之殘り両役共配當中付候事。
一御天守御鏡餅神酒御臺所奉行差出ニ付差上之。同役頂戴。

九　日

一明十日圓壽寺御參詣之旨被仰出候ニ付御倍膳申渡。
御小姓頭。御馬役。御臺所奉行。中間頭。御供目付。郡奉行。(圓壽寺宗門之儀申達之。)大次當番。
御普請方町奉行。
廊下橋奉行江手紙左之通。
以手紙致啓上候、明十日五ツ時御供揃ニ而圓壽寺被成御參詣候旨被仰出候間押籏之者両人可被仰付之候。此段爲可得御意如斯御座候。　以　上

上書切封
手鳥大記様　　正月九日

但、大記者列座格ゟ籏奉行被相勤候ニ付如此列座格ニ而無之節ハ是也。
御中小姓江者御供之順書出候様相違。其上一人相撰相伺候上、御刀番被仰付候事。但、嘉永二年正月ゟ御近習番佐藤七郎御刀番被仰付候ニ付御出之節ハ毎も召呼相違候事。
弘化ニ乙巳年正月十日
正月十日定例圓壽寺御參詣之處先例茂有之候ニ付今五ツ時御供揃ニ而松榮山ゟ圓壽寺通御參詣最御初入之儀ニ而御參詣与差別有之候ニ付記之御倍膳左之通。但、兩天ニ付御延引。

當番姓名

一御小姓頭　一御中小姓　御供之名前爲書付取調之上、御刀番両人被仰付之。御供名付之内御刀番可相勤仁無之節者別人江被仰付之。御刀番兵六人也。
御醫師へ
一御馬役　一御目付　一御持小頭　一中間頭　一御臺所役　一大次當番
一御籏之者両人江申付候様手紙ニ而申遣之。(押籏之者ハ坊ヶ小路鷹一郎水主之者へ爲乘廻御渡申上候様手紙ニ而申遣。)
一御除奉行　一御普請方　一御鋪奉行　一町代官
去辰九月十一日近説公御初入初而御參府之節ゟ先規之通牧村萩原村中津留村庄屋共途中江罷出候様被仰付候ニ付猶又御道筋掃除等も有之由。又坊ヶ小路之儀ハ御供廻り被船之儀申遣候様相違之旨ニ付記之。
一福壽院之儀ハ御初入初而御參詣之節与四月八日御祭礼之節斗罷越平常御參詣之節ハ不罷越。
右御祭礼之節御參詣御延引ニ而御名代并御祭礼奉行相勤候節も罷越。
一御除奉行之儀ハ表立御參詣之節ハ御除口ゟ御案内申上之候ニ付、御供揃之節召呼申渡之。

但、東遠御野越御忌御出之節者、御参詣有之候而も不及沙汰事。

十　日

一今朝五ツ時御供揃ニ而圓寿寺御参詣事昨日之所ニ有之。
一今朝證眞院様御霊前御代拝列座中被相勤候段被申聞候ニ付則申上之。
御留守中者右御代拝被相勤候ニ付江戸表江申遣事。
一明十一日御讀初被仰出候ニ付左之面々召呼申渡之。御城代列座御家中へ八年寄中ゟ被相達。尤、五ツ時揃。御留守中五ツ半時揃。

御小姓頭　大次當番　御醫師　御帯除之儀
御中小姓當番

一右御讀初相濟之上、講師江御酒被下候間用意候様御臺所ニ付へ申渡之。
但、讀書場ニ而讀初之節八聖像江神酒三合宛付之。
一御在城年寄中、、、酒被下御在府年八御獻斗被下、、、、、。但、近来御年寄中支配講師相勤候得共何方ニ而違被成候得共、前々八拙者共於席御意之趣を以相達候。後ニ相見申候御調被下之高年寄中支配ニ而も拙者共、、相違候儀被仰付。此度御酒被下候儀も、年寄中被相違候様申度候事。（付箋）

十一日

一今日例刻於大書院孝経御讀初有之。御城代列座御家中之面々罷出委細昨日之所ニ記之。
一右相濟講師江於大次御酒被下之。御吸物一ツ肴貳種給仕坊主。
但、御儉約中者、御獻斗はかり出之。尤淳兵院様御家督御初入之節八初而之儀ニ付定例之通被下。

一文政二年八講師江御吸物肴一種被下。御用人之席御朱印長椅前ニ而被下之。
御留守中。

一於善古場讀初有之聖像神酒三合。

十二日

一(朱)今日大書院ニ而月並講釋有之、八ツ時ゟ登城。殿様御出座。但、前々今日ゟ月並講釋有之候處當時八来ル廿四日ゟ始。但、毎月七日、十六日、廿七日。
一今朝齊林院様御霊前御代拝、列座中江相勤之。

十三日

御留守中。

一御勘定所勤人名前書付御勘定奉行差出ニ付何れも召呼來ル十七日ゟ致出席候様支配之分へ申渡之。
但、御近習番御中小姓、御徒士一同ニ召呼申渡之。其以下八頭々へ申渡之。
一(朱)井出御善講大奉行名前書付御勘定奉行差出候ニ付其積ニ而相達候事。（付箋）
御在城年者十五日ニ申渡之。（近来御中小姓迄出席相成候ニ付）

十四日

一明日御禮刻限伺之事。
一今日年越ニ付講者所ゟ登城之面々麻上下着用。

詰。町組　詰。里郷
詰。中郷　詰。與郷　詰。

十五日

一今朝例刻御禮被爲請之。諸事元日之通。

一御具足御祝儀ニ付御中小姓三人召呼。右御祝儀ニ付惣給仕被仰付。猶又御三方御給仕茂被仰付候段申渡之。

一御家中之面々元日之通大書院御禮席江居流。出御之上、御具足餅竹木ニ而御中小姓共引之。但、御小姓惣給仕相濟御流頂戴。御土器御小姓兩人兩側江罷出銘々之前ニ置之。引續御酌之御小姓兩人罷出相勤跡ゟ御肴、同役共引之。右相濟御中小姓以下元日之通、三人組ニ而罷出御具足餅頂戴相濟之上入御。

但、御流頂戴之節、銘々江御土器差置候儀相止、双方江之御土器相廻候樣相成來候處、嘉永二年ゟ銘々之前へ土器差置候樣相成。

一御近習番御右筆御扶持方斗之醫師御茶道、大次ニ而御餅頂戴。

一同役共御小姓頭大目付御醫師御用人席ニ而御餅頂戴。給仕坊主。但、此節も非番之同役申合大書院江出座。

一切符之面々御禮之節者、御三方三ツ。

當日御不例ニ而御流之節、出御無之候得者、御中小姓以下御船頭迄御用人席ニ而御餅頂戴。其節三寶五ツ其外無相替儀。但、寛政之度、正月廿九日ニ御祝儀有之。天保十四年八正月廿八日御祝儀有之。

一(朱)御用年中者、當時御上下茂無之ニ付隔年御在城之時之形ニ而御具足御祝儀之御餅。御家中八大書院ニ而、御在城之時之形ニ而頂戴。御中小姓已下八三人組ニ而御用人席ニ而頂戴。御近習番御右筆御扶持方醫師御茶道御臺所目付御近習番所ニ而頂戴。御小姓頭大目付御醫師御用人席ニ而

頂戴。給仕坊主。御在城之順年者三月三日、五月五日右同斷。

一當日御具足御祝儀中、麻上下着用之所、近來終日麻上下着用。

一年始御料理被下候節、年寄中拙者共御小姓頭御醫師迄江被下之。尤日限被仰出候得者前日御意之趣年寄中へ者彼方席江罷越申達之。其餘ハ相招申達之。御臺所江茂用意之儀申渡之。御茶之儀御茶道江給仕御徒士頭江申上之。

一御料理年寄中席ニ而頂戴。尚又年寄中同役御盃頂戴。右之節御醫師一人御給仕申付之。

御留守中

一今日御禮於年寄中宅謁之。麻上下着用。但、終日。

一御料理被下之儀從江戸御下知次第御意之趣、右同樣申達。日限不相究。

一御鷹之鴈御拜領之上ハ、例年鴈肉到來之上、右之面々御吸物頂戴。是も日限不相究。

右兩樣共給仕御歩行五人也。

十六日

一(朱)明十七日觀音御供養ニ付福壽院江左之通手紙差遣。

以手紙致啓上候。明十七日觀音御供養ニ付被爲召候間例刻御登城被成候。此段得御意之。

上書切符　福壽院　當番

嘉永元申正月十五日ゟ始。

御留守中。

一今日九ツ時揃ニ而於沖濱浦左義長有之。依之松餝之内菜笹賜ひ、同所へ持出候樣支配頭共江相達之。

但、御目付以下者、内三口御門脇江持出置候樣相達之。御家中并町方へ者年寄中ゟ被相達之。

尤中間頭江後右同様松餝之内、差出候様、尚又内三口へ相集候松餝十六日朝迄芳崎浦へ為相運候様中半共へ可申付旨申渡之。且又松餝山拵方者御家中二男三男馬術出精之向江御馬役ゟ相頼ル事。

同二酉年正月十六日

一今四ツ時御供揃ニ而芳崎浦江御出。尤火事御装束前日左之所へ相達之。

御小姓。大次當番。御中小姓六人。但野支度也。御臺所目付。御茶辨當并貝吹坊主之儀。御持小姓御持之者両人。

御普請方。御様数掛。御目付一人。御目付一人。御徒士大身鑓一本、御馬印御箱一ツ。大納戸。御纏差出候様。御馬役。

一同役共御供罷越不乗馬。同役共見分之様敷江年寄中与一所ニ罷出御供之同役。尤、火事装束。

一四ツ半時相揃候上、中嶋浦ゟ為知之螺坊主へ為吹之螺相聞次第相図有之候与御出馬也。引續乗馬之面々乗出之。尤廊下橋相揃居候事。但相図拵前以木本弥五郎江申付置候事。

十七日

一(朱)今日観音御供養ニ付福壽院被為召御布施白銀壱両、、珍箱相認之。

但観音御供養之儀ハ御代々之儀ニ者無之。近倚公御代依御位、聊正五九月福壽院被為召之。其外御代々之御命日御正當ニ者、淨安寺被為召御早世様方之御願月ニ者御内佛へ被為召候事有之。」

廿四日

一今朝五ツ時御供揃ニ而台徳院様御靈前淨安寺御参詣、昨廿三日御供觸申達。

一今日ゟ於大書院月並講釋有之。委細者去ル十二日之處ニ有之。

一宗門奉行御目付明日ゟ出役ニ付御前江被召出。尤前日申上、其旨奉行御目付へ申付置。例刻登城之上、當番迄披露見習罷越候者御逢無之。

但、奉行御目付一同、御前へ罷出。當番平服也。

廿五日

一松靈院様御靈前御代拜列座中被相勤之。

廿八日

一寂静院様御命日ニ付淨安寺御参詣。前日御供觸申渡。但、御参詣無之節、御城代列座衆御代拜被相勤之。

晦日

一明朔日當秋御参府之御供名前左之通呼廻状差出。尤右名前前以相伺置候事。但、御供馬出府之同役取扱候事。

一文恭院様御命日ニ付圓壽寺御参詣。但、小ノ月者廿九日御参詣之事。

正月中日限不相究定例左之通。

一由原御参詣被仰出候節、左之通筋々へ相達之。

一廊下橋御給人御番所。御清之儀、御供目付を以差遣尚又何時御供揃ノ旨。（當番ニ人有之候ハヾ御供名前書出ニ及不申候。（付箋））

一御小姓頭。御清之儀召呼申達之。尚又同断。

一御近習番。同断。

一御中小姓。同断。

但、御供之名前書出候様申渡之。其上、人當相調相伺候上、御刀番助被仰付候段相達。

一、佐藤七郎御近習番ニ而御刀番故別段一人召呼相達之。

一御醫師。　同断。
一御目付御徒士。　同断。御目付へ申渡之。
一御馬役。　同断。召呼申達。
一町御代官。　春日御参詣之儀。
　但同所御神楽料御目録社人賄料書出相渡之。尚又生石御手水之儀申渡之。
一郡奉行。　由原へ御参詣之案内、并御神楽奏候様可申遣旨申達之。
一中郷御代官。　由原神楽料之目録相渡之。
一御持小頭。　御清之儀、中押御持之事。并御太刀才領御持之者申付之事。
一中間頭。　御清之儀。
一町奉行。　堀川口御番所御清之儀。尚又町廻御共之儀。
一御簇奉行。　押之者并御清之儀。
　福壽院。　御出掛御参詣之旨手紙ニ而申遣之。尤元日御参詣相濟居候節ハ不被遊御参詣。
一由原掛り。
一泊り番之者御清之儀申達候ニ付春日御出無之候共召呼申渡。
　春日御茶屋へ被成入候得者、御醫師一人罷越候様申渡之。御弁當其外用意之儀御臺所目付へ申渡。右之節ハ同役一人居残不残御誘引年寄中御誘引之節ハ當番申達之。當日同所ニ而申合御肴又者外品ニ而も御賞被差上候事。奥掛之同役女中罷越候節ハ罷越候事。
一明六ツ時御供揃子被仰出候節ハ、當日未明ゟ出入有之ニ付御門江相通候様廊下橋御給人番所

へ申遣之。
一福壽院江案内手紙左之通。
　以手紙致啓上候。明幾日何時御供揃ニ而由原江被成御参詣御出掛貴院江御参詣之旨被仰出候。
　右御案内可被御意如斯御座候。以上。
　　月　日
一御簇奉行へ手紙圓壽寺御参詣之節之通町奉行郡奉行江者大方詰合居候ニ付相招申達不詰合節ハ手紙ニ而申遣之。
一御参詣當日左之通御進献。
　由原
一御太刀　一腰　此目録并御太刀箱前日才領御持へ相渡之。
一御馬　一疋　馬代銀一枚
　右御右筆認之、大高檀紙。
一鳥目　一貫貳百文。御神楽料。
　是茂御右筆認之、中杉原。是ハ中郷御代官江相渡之。
　春日
一御太刀　一腰　是も由原御進献之品与一所ニ相渡。
一御馬　一疋　馬代銀枚。
　右御筆認之大奉書。
一鳥目　一貫文　御神楽料。

是も御祐筆認之。中杉原。

覺

一米　壹俵。

右者香日社人賄料候間可被相渡者也。

何　何　月　　御用人共　下知印押之。

御代官中

右書役認之下知印押御勘定奉行へ相渡倉付之上、截出年寄中下知印相濟候上、町代官江相渡之。

右御神楽料御目錄賄料書出町代官江相渡之。

一御跡乘同役共一人、供廻り左之通、前日筋之申渡之。

一同役　壹人　騎馬　麻上下着用。

附人足輕　貳人

自分若黨　壹人

内證雇足輕　壹人

右刀指四人之内、貳人馬脇。貳人先徒士。

草り取　自分者　壹人

鎧持中半　壹人

長柄傘持同　壹人

挾箱持同　壹人

畜籠持同　壹人

同　柱　貳人

合　羽　籠　貳人

一殿様長上下被爲召御出掛福壽院御參詣。但　此節ハ同役廊下橋前ニ罷左御參詣相濟候上、廊下橋前御通行御跡ゟ馬上ニ而御供。

一鳥　目　壹貫文　御初穗、御祐筆認之。

二重操壹居　同役持參。

一江戸ゟ年始御便到來。

上々様益、御機嫌克被遊御超歳候旨申來候節、左之通麻上下着用御役宅廻勤候之様申渡事、

御小姓頭　御中小姓　御醫師　御普請奉行　同御目付　御近習番

御祐筆　御徒士頭　御臺所目付　御供目付　御舟奉行　御代官

御馬役　御露除奉行　御持小頭　中間頭

一上屋敷書付年寄中被相渡候節左之通書付御勘定所勤人之内、上ヶ屋敷掛之方へ差遣候之事。

覺

何町

一表口　何間　何町　誰

入　何間

右之屋敷差上度申願之通申付候以上。

正月

一上り屋敷今年貢地ニ申付候節も右同様ニ申遣候事。

但、何町誰上屋敷、何町誰、右之通依願年具地申付候与相認之、御家人ゟ之依願ニ而も上り屋敷ニ

相成候歟、又者上リ屋敷を年貢地相願候節ハ同様申遣事。

一 御家人御年貢地を御免許ニ相願候節ハ年寄中ヶ御勘定奉行へ被致沙汰候付外ニ不及相達。

一 建家差上候節ハ御普請方へ申遣候事。

一 由原祇園ヶ正五九月ニ者、公方様御祈禱御禮差出、御祈禱料同役宛ニ而證文差出候ニ付御雜用宛裏書相調取次之御代官へ相渡之。

但、由原壹メ貳百文　祇園拾匁也　尤御儉約中ハ右證文ニ年寄中之下知印元メ之印押之。

一 御親類様方へ年始恐悦状差出候節、被成下御書被得者御請左之通。

一筆致啓上候。何ノ守様益御機嫌克被成御座奉恐悦候。然者就年始各様迄捧愚札候處達御聽被成下御書謹而頂戴之仕難有仕合奉存候。右御請爲可申上各様迄如此御座候。此段御序之刻宜御執成奉願候。恐惶謹言。

月　日　　但　其外暑寒被露状差出候節、御書被下候時も右之通文言ニ而御請。

彼方様

御用人宛様

一 御末家様ヶ年始御直書到來之節、御請。

一筆令啓上候。式部少輔様益々御勇健被成御座下憚目出度御儀奉存候。然者就年始被成下御直書厚仕合奉存候。右御請申上度各迄如斯候。此段宜賴入存候。恐々謹言。

月　日　　但、其外之御請も右同様之文言。

御用人宛殿

二月

朔日

一 今朝例刻月並之御禮被爲請之。御家中斗也。尤切符ニ而も宗門奉行鉄炮願者罷出。嘉永二年二月朔日五ツ二分ヶ日蝕ニ付御禮六ツ半時揃ニ而被爲請之。

但、御通掛御近習番御右筆。（朱）御扶持方醫師西川道友例。」

一 法性院様御靈前御代拜列座中被相勤則申上之。

一 當秋御參府御供左之通被仰付其段御供之同役申渡之。御目付御徒士一同申渡之。御徒士頭差添ニ不及。御持之者貳人、小頭へ申渡之。但順々申付之。小賄、椀方、燒方、坊主、御膳焚、人足共。此分御臺所目付へ申渡之。御道具之者、御駕之者、御箱之者、御草リ取。御供目付へ申渡之。中間小頭、中間頭へ申渡之。厩之者、御馬役へ申渡之。中半共者、御乘船大概相知候上、人数相調中間頭江申渡之。且又代リ中半、千石夫。右同様郡方江申達之。

一 並便正月二日附ニ而今日御普請方ニ而爲相仕廻候ニ付前日御供目付御普請方目付立合之儀相達之。右並便相仕廻候上、貫目員数書両人一同差出之。

二日

一 今日江府表江御便差立、定例相成委細十三日之所ニ有之。

十日

一 澄眞院様御靈前御代拜御城代并列座中被相勤之。則申上之。

十二日

一 寶林院様御靈前御代拜、右同斷。

十三日

一江府表江定例御使毎月二日ニ相成。但、弘化二己年二月発船を以差立候様相極。右規定左之通。

鯨　鮹　壹　縄

六人泰壹人ニ付一日白米六合ツヽ、廿日分被下之。一日三升六合。廿日分七斗貳升。外ニ一人貳拾日ツヽ被下之。合百貳拾日。

一廿日ゟ内罷帰候而も上納ニ不及被下切。

一廿日過罷帰候ハヽ御取替ニ而御扶持引之事。

壹ヶ年十二月合　米　八石六斗四升　札　壹貫四百四拾奴。

一米着御船方ゟ證文差出候ニ付御倉出之事。

一札ハ御納用。

一中國ニ而御指定之節ハ是迄之通。

但、隔年御廻米美年惣水主へ飛船登出精之由ニテ生涯一挺被下置候之事。

一右ニ付毎月八日御船頭左之通申立之。

一札百目　飛船登御水主六人。但、壹人ニ付廿日ツヽ被下。

一米　壹石貳斗　六人分扶米。但、壹人一日ニ付壹升ツヽ。倉於差出置。

一並油　三合。

一薄縁　六枚。敷而相渡置。

但、薄縁之儀ハ損候ニ付筵ニ表付候ごとく相渡。尤損之節申立可之。

十四日

一明日御禮刻限何之事。

十五日

一御禮例刻被為請之、明日之通。

一御拝領之御鷹之鳥次頂戴之節給仕御徒士頭江申渡之。年寄中同従引込之節ハ御小姓御使ニ而被下之。麻上下也。但両従御内用ニ而大坂江被相詰候節ハ御使之節、雁肉曲ものニ入差立候事。

十六日

一光澤院様御命日ニ付例刻浄安寺御参詣前日御供觸申渡之。

廿五日

一松盛院様御霊前御代拝御城代、列座中被相勤則申上之。

廿八日

一例刻浄安寺御参詣前日御供觸申渡之。

一(朱)御餅搗小奉行両人御臺所ゟ申立前之候ニ付月番壱頭江以手紙申遣。」

一大坂御ゟ付并手代三月交代来給日限当月廿八日、三月二日迄之内申渡。

但、御ゟ付ハ召呼申渡、手代ハ御勘定奉行へ申渡。尤前日御ゟ付へハ御逢前之。

一右ニ付内拝借之儀、相願候得者左之通。

御ゟ付内拝借銀百六拾目。　手代銀七拾目。

但、右ニ付内拝借之儀、近年時節柄尚見所柄其上武芸詰ニ付記越内拝五拾目ツヽ被下候處、其後詰越内拝借百目ニ相成候ニ付百目之方を乗船之節内拝借申付七十目を詰越之方ニ申付。尤詰越内拝借百目ニ相成候ニ付百目之方を乗船之節内拝借申付七十目を詰越之方ニ申付。尤詰

當時三月十二日伺出候樣相違、
一御留守中看板吉祭禮御目付二月廿八日伺出ニ付申付之、
一卯酉年若宮八幡宮坊ヶ小路御幸有之節ハ、神主治部大夫ゟ左之通御奉行を以申立候ニ付吉之儀ハ
御船奉行江相達、馬具之儀ハ御馬役江申渡之、
一船　吉　百貳拾枚　一馬　具　三背
一長柄持羽織　六ツ　一長　柄　六本　是ハ年寄中へ相願、

三月

朔日

一節句間近ニ付今日御礼無之、

38

一法性院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之、

一若宮祭禮ニ付御目付出役之儀伺出候ニ付年寄中へも書付差出御前江相伺左之通被仰付候段一同
席江召呼申渡之、

若宮祭禮　御目付　二　日夜　貳人
三　日　貳人　以上、

但、出役貳人ツヽ之處、天保三辰年七月廿三日ゟ御取縮中ニ付壹人ツヽ相成候、
御目付御人少々ニ而差支候節ハ御目付代御徒士頭一同申渡候上、本役一同呼出申渡之、
安政五午年ゟ

一右祭禮之儀御趣意有之已來ハ三月十五日祭禮相成候付御目付出役之儀ハ十三日伺出候樣申渡之、
一若宮祭禮卯酉年坊ヶ小路江御幸有之節ハ御鎭座中御目付兩人見廻申付候事、但二日三日ハ本書
例年通被仰付、其餘者見廻り還御之節ハ申含出役候樣相達事、近頃區々相成候ニ付安政二年如此取極、

二　日

一明日御禮刻限伺之事、

三　日

一上巳之御禮、例刻被爲請旁御餅頂戴、諸事正月之通御船頭迄三寶三ツ出之、御給仕御中小姓五人
申付之、

十三日

一來ル十七日松栄山神天祭禮ニ付出役候樣左之ヶ所へ申達之、但安政五年ゟ三月ニ相成ル、
御路除奉行　町調役　（明治二巳年ゟ出役廢シ御路除奉行斗ニ成、）（書入）

39

十四日

一明日御禮刻限伺之事、

十五日

一今日例刻御禮被受之、

（缺）十七日

一明十八日御天守下神天祭禮ニ付福壽院江左之通手紙差遣、
以手紙致啓上候、明十八日御天守下祭禮例之通御勤行可被成候、尤入用之品々御臺所ゟ請取
可被成候、此段爲得御意如斯御座候、以　上、
三月十七日

十八日

一鐵炮口明之儀左之ヶ所ヘ相達之。
御小姓頭　御近習番　御中小姓。
廿四日
一日根野織部正様御祭禮ニ付於圓壽寺今日ゟ明後廿六日迄角力興行御免被仰付候ニ付御目付申合見廻之儀前以申付之。但、右祭禮弘化二年三月ゟ相始。
(案)坊ヶ小路禹王辨天祭禮福壽院ニ而執行。」
廿五日
一松蓋院様御靈前御代拜御域代列座中被相勤。則申上之。
廿八日
一今日例刻淨安寺御參詣。
昨日
一明日御禮刻限伺之事。
三月中
一宗門奉行并御目付御改罷歸御逢之儀ハ御家中之者迄御改相濟候上、御逢之事。
一御參勤之頃合御伺例年二月中、江府ニ而取斗、四月中迄ニ御伺呼之段當表ヘ申越候上、京都諸司代様并大坂御城代様江御指立之事。
四月
朔日
一今朝例刻御禮被爲請之。

十日
一澄眞院様御靈前御代拜御域代列座中被相勤則申上之。
十二日
一寶林院様御靈前御代拜。右同断被相勤。則申上之。
十三日
一來ル十七日東照權現御祭禮ニ付左之通書出福壽院ヘ相渡之。
但、書出御勘定奉行ヘ相渡、御倉出印形相濟同人ゟ受取年寄中ヘ指出印形相濟之。
覺
一米　壹俵
右者權現様御祭禮ニ付福壽院江被下候間可被相渡者也。
四月
御代官中、(周治二己巳年より御用人共此手數止會計ゟ取計ニ相成候)(書入)
十四日
一明日御禮刻限伺之事。
十五日
一今朝例刻御禮被爲請之。
十七日
一今日權現様御祭禮ニ付福壽院江御參詣。但、例日淨安寺御參詣之節通御供觸前日申渡之。
一右御祭禮ニ付年寄中社者共麻上下着用拜禮罷越。

十九日

一明廿日圓壽寺御参詣之旨被仰出候ニ付御供觸申渡之。諸事正月十日之通。

廿日

一今五ツ時御供揃ニ而圓壽寺御参詣。

廿三日

一明後日松榮山栖克大明神御祭禮ニ付福壽院へ左之通手紙差遣之。

以手紙致啓上候。明後廿五日例年之通栖克御祭禮ニ付毎之通御出御勤可被成候。右入用之品々御臺所ゟ御受取可被成候。以上。

四月廿三日

右之通御名代罷越候同役ゟ手紙差遣御留守者廿三日右手紙差遣之。

明治三庚午年ゟ瀧山建御祭禮出勤相成傳之申立品々民政ゟ一紙書付差出。此書付へ御一判居へ御臺所目付へ相渡ニ付同所ゟ受取候樣民政へ申与。但、已前福壽院之申立手紙如此ニ付先規之通。（書入）

一右ニ付御普請方江も相達候事。

一右ニ付御露除奉行出役之儀申渡之。

一弘化二己巳年四月右御祭禮ニ付同役御名代御祭禮奉行兼被仰付。尤當年ゟ馬上ニ而罷越候樣年寄中被申聞候ニ付左之通供廻リ召連之。

附人　貳人　不殘御持之者相賴。

自分草リ取　壹人

挾箱持中間　壹人

口控　貳人　但一人ハ本役、助中間申付之。

沓籠持中半　壹人

鑓持中間　壹人

外ニ雨天之節合羽籠持中半　壹人

〆九人

右御祭禮ニ付左之ヶ所へ申渡之。

御馬役　御臺所目付　中間頭　御普請方。

一右御祭禮之儀已來八月朔日之通御名代年寄中被罷越候樣被仰付。嘉永六年丑四月廿八日相極。

一明廿五日淨安寺御参詣被仰出候ニ付御供觸申渡之。

廿五日

一今朝例刻淨安寺御参詣。但、松盛院樣御稱月ニ付御参詣。

一右御参詣御延引之節ハ御称月故年寄中御代拜相勤毎月者御城代列座中被相勤之。

一右御称月ニ付御隱居樣御代拜同役相勤候事。

一松榮山栖克大明神御祭禮ニ付同役壹人、福壽院上下御露除方壹人御臺所ゟ小腑坊主人足罷越。

一（来）但先年者御臺所目付御用人共書役壹人罷越候得共、寛政年中ゟ相止。

一右罷越候同役左之通召連。

附人　足軽　壹人。　自分若黨　壹人。　草リ取　壹人　挾箱　壹人。

但雨天ニ候者合羽籠　壹人

御在城年者御参詣無之節ハ罷越候同役御代拜御隱居樣御代拜茂相勤之。

廿八日

一今朝例刻淨安寺御參詣。

廿九日

一明日御禮刻限伺之事。

五月

朔日

一今朝例刻御禮被爲請之。

一法性院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上候。

二日

一糠卷小奉行足軽貳人、明日ゟ御臺所へ被差遣候樣月番者頭江以手紙申遣之。

四日

一明日御禮刻限伺之事。

五日

一今朝例刻御家中切符之面々御船頭迄御禮被爲受之。委細上巳之通。三寶三ツ御給仕御中小姓五人。

一御小姓共端午御四季施前廣御雜用江申付書出差遣左之通。

覺

一銀貳拾八匁五分宛　御小姓共名前端午御四季施代。

一同貳拾壹匁七分五厘宛　御小僧　右　同　斷。

一同貳拾八匁五分宛　御茶小姓。

合銀　何程。

右之通勘定拂可相立者也。

何　何　月　御用人共御雜用

但、嘉永申九月ゟ御小姓江戸往來無之節ハ御四季施半方被下。右者部屋住之向江戸往來無之節御宛行半方被下候故右ニ准ジ半方被下候事。

七日

一明八日圓壽寺御參詣御供觸、其外正月之通。

八日

一今日例刻御供揃ニ而圓壽寺御參詣。

十一日

一明十二日雲晴院樣御称月ニ付淨安寺御參詣御供觸例之通淨安寺へ案内手紙左之通。

以手紙致啓上候明十二日雲晴院樣御稱月ニ付御寺江御參詣被仰出候。右御案内爲可得御意如斯。

御座候。以上。

五月十一日

十二日

一今日例刻淨安寺御參詣。

(朱)但、長門守樣御代御門拂安置ニ而和尚御非時被爲召候節ハ御布施白銀壹両前日其旨淨安寺へ申遣之。

十四日

一明日御禮刻限伺之事。

一(朱)明十五日早苗祭ニ付福壽院被爲召候段被仰出候ニ付以手紙申遣之。」

十五日

一當日之御禮例刻被爲受之。

一(朱)今日早苗祭ニ付福壽院被爲召年寄中同役江御重之内被下之。

但、御備斗外ニ赤飯壹斗貳升御臺所ゟ與江相廻與ゟ兩役江御重之内被下之福壽院江御施物有無之。

十七日

一(朱)今日觀音御供養ニ付福壽院被爲召委細正月之跡留有之愛畧。

廿五日

一松嶌院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

廿八日

一例刻增安寺御參詰。

晦日

一明日御禮刻限伺之事。但、祇園山頭人共御通掛御目見之儀。(明治二己巳年ヨリ御城下惣持相成候得共先規當事なし。(書入))

一右頭人共御城江罷出候ニ付御門人之儀御町奉行ゟ申出候上廊下橋御詰人番所江手紙を以申遣之。

御小姓頭人次江も相達事。

一當月由原御參詰被仰出候得有諸事正月御參詰一件之末ニ有之通。

一當月由原祇園ゟ御祈禱御札差出御祈禱料證文正月ニ同じ。

一御獻上梅支度左之通。尤差立有六月中旬也。才領足輕貳人江申付置候樣月番壱頭江前廣申遣之。

日限八千上出來之日間次第ニ申遣。

一粕漬梅　百入一曲　御獻上

一同　拾　餘分

合

西御丸

一粕漬梅　百入一曲　御獻上

一同　拾　餘分

合

一梅　千　百入一曲　御老中

但、御側御用人有之節ハ御老中並也。

一同　千　五拾入一曲宛　若御年寄御側

合

一殿樣御用

粕漬梅　三拾

一梅　千　西

御隱居樣御用

一粕漬梅　五百

一同信濃梅　三升
一同芽生姜　荒升七升

大奥様御用
一粕漬梅　三拾
一梅干　百
一粕漬芽生姜　荒升六升

御献上餘分
一梅干　百五拾
弘化三午年ゟ如斯差立候様相成。
一紫蘇梅
一粕漬梅　御臺所御用
一梅干
但、此分當時者別段不仕立御往来有之節斗也。當時之帳面ニ不載。

大梅　總合

外ニ
一梅干　五十入一曲
一同断
一同断
一同断
一同断

京都御諸司代
大阪御城代
同御城番
御町奉行貳人
御町奉行壹人

合

右之分大阪江差立。江戸表御献上相濟。江戸同役ゟ差図次第差出候様申遣置。江戸同役江も御荷物差立候節、其趣申遣置之。

一右御殿笑容之間御役人様方へも以前者被進候得共寛政二戌年御献上ゟ相止。

一御献上者七月、八月也。延着ニよつて御届被差候得者九月ニも相成。梅無之節ハ引替葛粉御献上。古來引替干蕨也。近來葛粉。文政五壬午時、梅拂底ニ付引替伺相濟葛粉。

（御献上御愛草已來御廢し、鮎も同様、上御用之外相除可申哉、先規候。矢張此儘頭置可申哉）（付箋）

六月

朔日

一今日御禮例刻被爲請之。出御祇園山之頭人共御目見申上献上物有之。尤頭人共御玄関ニ罷出當番之同役御中小姓番所ゟ山頭人共与披露ス。但頭人献上御樽着也。

一法性院様御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

六日

一明日観光院様御稱月ニ付淨安寺御参詣御供觸申達。五月雲晴院様御稱月之通。

七日

一今日例刻淨安寺御参詣。

一（朱）明日中嶋稲荷祭禮ニ付例之通被相勤候様。尤入用之品々者御臺所ゟ御受取被成候様、手紙差遣。

八日

一祇園祭禮出役之儀御目付伺出候ニ付四人申合両人ツヽ出役候様相達、夜分ハ参詣人相止候上、見合引取候様。

一（朱）今日中嶋稲荷祭禮。

十日

一證眞院様御靈前御代拜列座中被相勤則申上之。

十一日

一明十二日贈位様御神前ニ付増安寺御參詣之旨被仰出御供觸申渡之。
一明日獅子舞長命六天罷通候ニ付御門入之儀廊下橋へ以手紙申遣之。
一右ニ付例之通三寶爲差出候様御屆所目付へ相達之。此手數内知務へ相達之。
一右ニ付例之通御玄關番髭受取此方へ差出候様御在城ニ付殿様御在城年之通御城へ來。
但、天保十四卯年并辰年午年御聽居様御在城ニ付右ニ同斷。

十二日

一今朝例刻淨安寺御參詣。
一寶林院様御靈前御代拜列座中被相勤之。但御參詣ニ付御參詣有之節ハ別紙御代拜なし。
一今日例之通獅子舞御玄關江罷越。尤里千代樂内獅子髭此御玄關番受取。尤平服也。拙者共廊下立持參則受取差上之。尤前刻三寶御玄關江差出置候旨壹貫文被下之。
（明治三庚午年ゟ髭御定番論取壹候樣ニ爲相廻之。）（書入）
但、右爲引者前以御雜用へ申付置、尤右御子料其外祇園會入用之品々前廣書付を以郡奉行差出下知印致遠候事。

右者鳩屋御濱ニ付小賄ゟ相渡候樣御靈所奉行へ相達之。獅子料爲引壹ノ文以前者下靈所掛之者ゟ相渡來候得共同所濱相成候以來小賄助御持平助ゟ相渡候樣御靈所奉行へ申渡候事。但當時者郡奉行ゟ差出候證文江勘定所ニ而倉付調印之上、兩從下知印ニ而郡奉行江相下之。
一右祭禮ニ付左之通祇園日野祝所ゟ書付差出候ニ付筋々江申上之。

一弓　貳張　一鼓　貳ツ

右御持小頭江申付之。但、此貳品近來申立無之。（明治二年申上無之法關之事。）（書入）

一三ツ道具　但、年寄中ゟ御繕奉行へ被及沙汰。

一長柄持羽織　拾　但、御普請方江。

一長柄　拾筋　但、年寄中ゟ御繕奉行へ被及沙汰。（朱）以前者此共ゟ以手紙中遣之。

一兼綱　四房　但八拾枚之儀ニ付御町奉行ゟ申付差出候節ハ御船奉行ゟ申遣候。

一長刀（中間小頭麻上下着用ニ而。但、近來相止。）（又申立被出）（書入）

一祇園會ニ付祝所ゟ申立左之通。

一、御供米　壹　石

但、當時者玄米ニ付倉付之上兩判也。

（明治二己巳年ゟ御一新ニ付倉付廢止御書出氏書ゟ差出候樣被成ル）（書入）

一御注連竹　五　本

但御出方、尤別紙證文差出候ニ付下知印被遣之。

（、、も別紙書付不差出ニ付山方へ差圖）（書入）

一錢　壹貫文　獅子料

但、雜用へ申付之。

一警固　六　人　一羽　織　拾　但、御普請方へ申付之。

但、年寄中ゟ被及沙汰。

一長刀　拾　本　但年寄中ゟ。

十三日

一祇園祭禮ニ付御目付共出役之儀相伺候ニ付申上候上、左之通申付之。尤年寄中へも書付壱枚差出之。

祇園祭禮御目付

十四日夜　壹人　姓名書

十五日　壹人　同断

但　御目付御人少之節者、御目付代御徒士頭一同申渡之。畢而本役一同呼出右書付相渡、

右御徒士頭一同祭禮御目付与申渡候得者御目付代御免之不及沙汰。祭禮相濟候得者直様歸番也。

右出役之儀以前者貳人之所、天保三辰年ゟ壹人ニ相成。

（明治三庚午年ゟ賑有之節、三人被仰付壹人詰ニ成。）（書入）

一御祓入用之品々由原金藏院ゟ郡奉行を以申立有之候ニ付左之通。

一羽織　拾ヲ　御普請方へ申付　一御鞍、五口　馬具共

一中間小頭羽織着用罷越候様、　神馬　三疋　御馬役江申付之。

一警固六人年寄中へ申立有之。　但一両年者申立無之。

御祓入用

一反へ竹　六束　一中竹　三束　但拾本持。

一六竹　四本　一縄　拾束　但里郷司倉ゟ願出。

右郡方ゟ申立有之下知印之上相渡之。

一住吉祭禮猩々誹貳ツ、弓貳張、數共申立有之ニ付王品共御持小六江申付之。尚又餝鐘六本申立有之候ニ付被相渡候様鐘奉行へ以手紙申遣之。

右祭禮入用何れ茂申立之日付ハ違候得共此所ニ留置也。

御祓放生會御厩別當差支候節右代足軽御者頭江申遣。尤御厩別當代与申遣候事。

但、御持別當羽織御持小頭江相渡候様申渡之。

安政五午年ゟ三月ニ相成。

一來ル十七日松榮山辨天祭禮ニ付町代宮罷越候様尚又右ニ付御靈除奉行出役候様召呼相達候事。

十五日

一今日如例年御禮無之。

廿日

一今日有德院様御稱月ニ付圖壽寺御参詣。

廿二日

一淨安寺ゟ御佛前入用并臺所入用諸道具願申立有之候ニ付致下知判差遣筋々江及沙汰候處當時壹ヶ年中入ヶ壱メ目ニ相極、寺ゟ受負相成候ニ付不相記畧之。」

廿三日

一御留守中住吉御祓御目付今日被仰付候事。御在城年者廿六日也。委細廿六日之處ニ有之。

（御名代期日大参事ト成）（書入）

一今日列座壹人御祓御名代於御前被仰付披露無之前日御用之趣申遣。手紙左之通。

以手紙致啓上候明廿三日可被成御逢旨御意御座候間五ツ半時御登城可被成候此段爲可得

御意如斯御座候。以上。

六月廿三日

右御名代御留守中者年寄中ゟ被相達之。

御在城年も御前江不被召出候節八年寄中ゟ御意之趣被申達。但、列座衆登城被致居候得者序ニ罷越申達登城無之候得者手紙差遣遲刻御請被申聞候ニ付其旨申上之。

一左之通御名代ゟ申立有之候ニ付筋々江及沙汰。

御納戸江　中間頭江

一若黨羽織　五　一中半　捨三人

御堂所江　御普請方江

一箱辨當　六　一若黨笠　六ツ

一面同通　十四　一中同間笠

一坊同主　一看同板　十四

一茶同辨當　一青同染合羽　六

御馬役江

一沓籠　一赤同合羽　十四

一奉同馬　馬見共　一合同羽籠　貳荷

（以下別紙插入しあり。参考の為ゆゑ、に載す）（編者云）

一中間　十二人　一ふ合羽籠　二荷

一〇面通　十二　一ふ番板　十三

（一）一ふ若黨笠　四ツ　（二）一ふ拾羽織　貳ツ

一ふ同合羽　四ツ　一ふ明治二巳年六月御被御名代供建取扱。

一ふ赤合羽　十三笠共　先徒士　弐人

一〇茶辨當

御組事。

（三）駕脇　壹人　（四）箱同　壹人

同　壹人　茶辨當　壹人

草リ取　壹人　合羽籠　貳荷　三人

鎧持中半　壹人　駕　四人

傘同　壹人　十六人

廿五日

一松盛院様御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

一住吉御被祭禮御目付出役之儀相伺候上、申上、左之通申渡之。年寄中へも書付壹枚差出之。

住吉祭禮御目付

廿七日夜　壹人

廿八日　壹人

御被御目付　壹人

以上

但御目付御留守中者廿三日被御付也。

一明日菅洩妙婦御次江罷出候ニ付左之通廊下橋江手紙を以申達。

以手紙令啓上候明日菅洩妙婦名代税右近御城江罷出候間御門御通相成候。以上。

六月廿六日

上書

廊下橋　御當番中　當番名

廿七日

一菅洩妙婦名代右近大次江罷出候ニ付當番之同役御名代相勤之上下着用。

右管渡妙婦御留守中者御近習番取次麻上下着用候様前日申渡之。
但大次御番所御近習番御中小姓打込御番ニ付詰合之者相勤候様前日當番へ相達。尤両番所之
節ハ御近習番之方へ相達候事。
一御初穂　西文　前以御雑用へ申付之。
一御洗米　五升　同　御薹所目付へ申付之。
但　裏書三判也。

廿八日

一今日例刻淨安寺御参詣。

廿九日

一明日御禮刻限伺之事。

（書入）
明治三庚午年六月分左之通御名代大参事。
一若黨貳人、内壹人表分壹人自分者　一自分草リ取　壹人
一挾箱　中半壹人、此箱へ合羽入組　一甕、口控　壹人
一籠持　中半壹人、自分茶籠之事、面通持兼。」
一土用入三日目御機嫌相伺。尤三日目御日柄ニ者候得共二日目ニ相伺候事。
一右寛政十三酉六月十一日御機嫌相伺二日目也。三日目十二日者御日柄故如斯。
當時御日柄ニ而茂三日目御機嫌相伺。
一増澤虎之丞年寄中御逢後御前江被罷出之。
一此方共年寄中席江相揃罷出之。
一虫干之節、樟腦相渡候ヶ所左之通。

（朱）一四斤　御着頭　一三斤　大納戸　近頃貳斤ニ成。
一半斤　御小納戸　一壹斤　御持小頭
一壹斤半　御書物預竹内圓平　一壹斤　御家老、御用人、宗門方。
一半斤　御簸頭」
嘉永元申年左之通申立候ニ付大坂表江申遣之。
樟腦
一掛目　三百目　武館
百目之所追々願立ニ而三百目ニ相成。
一壹斤　大納戸
一壹斤　武器方
一三斤　御小納戸
但、貳斤之處嘉永二酉年六月分當時御本も相増ニ付已來三斤ツヽ、御渡被下候様申立有之。
一壹斤　御家老方
右六斤与三百目ニ相成候得共此表之掛目与違貳百目壹斤ニ付嘉永八卯年分六斤申遣之。
但、大坂表貳百目壹斤。此表ハ百六拾目壹斤之事。
（書入）（當時六斤此處ニ大坂斤ハ貳百匁少シ。余有之ニ付五斤申遣候而可然。明治二巳年如此）
一土用入ニ付左之通披露状差遣。
一筆致啓上候甚暑之節御座候得共殿様益々御機嫌克被成御座恐悦候猶又暑中奉伺御機嫌度
如斯御座候此段御序之刻宜御執成奉願候。恐惶謹言。
六月　日

右同文言ニ而　　右女言ニ而

御隠居様　　奥　様　　但、虎女宛　　同　　太田様奥様　　但、同：断

一御兄弟様方御部屋住之節八左之通、矢張同役宛也、以前勝三郎様被成御座候節も如斯。

一筆致啓上候甚暑之節、御座候得共何様益御安泰被成御座珍重ニ御存候。扨此度御客躰如此御座候ニ付飛脚足軽壱人持人中半壱人筋々江申遣之。

御容躰此度如此御座候此段宜被仰上可被下候奉願候。恐惶謹言。

六　月　　日

一(表)暑中ニ付御隠居様へ殿様分御直書を以御有一折江戸表ニ而取斗之事。

但、御小姓頭分御小姓頭江申遣事。

右ニ付奥様江御一品是又御小姓頭取斗事。

一土用中ニ付日田御代官様江御文書を以左之通被進候付飛脚足軽壱人持人中半壱人筋々江申遣之。

尤三日目御日附也。

公儀御日柄ニ候得者御日附醫博田屋源兵衛方へ拙者共分添状遣。

日田御代官様江　　生　千　鋼　　同　鰭　　同　鰭

一生　千　鋼　　一籠　但壹籠也

一御樋代、三百疋　　右三品之内、下直ニ相當候處用之。

文政二卯年分御貢代百疋ニ相成

右御目録前以御書方へ認申付之。

一筆令啓上候甚暑之節候得共弥無御別條御慕珍重存候。然者其郡代様江左衛門尉分書状壹箱并目録之通被致進覧候付飛脚足輕差立候間例之通宜御取斗納入存候此段可申進如斯御座候。

恐惶謹言。

六　月　　日

廣瀬源兵衛　様

状箱入

上包油紙菱掛差札

右同断　　名前

右御進物御留守中八年寄中分被差立。

但　御着御樽代目録等用意之儀拙者共分筋々へ申付之。

御在城中者此方ニ而取仕廻目録壹壹ツ御壹所回付へ申付事。

書状文言寒中之通宜也。

御献上梅御荷物弐領江掛渡貮目改御壹所目付御吟味方下役御普請目付立會掛渡相濟候上、御足輕小頭分書付差出、駄馬貮目不足有之節八足荷被下之。

年寄中江も判談之上、申付尚又御入ヶ銀年寄中江右書付を以申達之。其外入用品々八筋々分相渡候様申立證文江下知印遣。

但　メ目改相濟候得者立會之面々一同相居足荷等之儀申立候事。

一御朱印虫干之節、御小納戸之者江御酒被下之。且又御腰物掛研屋罷出候節八、御目付壹人申付之。

尤研屋江八町代官召呼申渡之。廊下橋御門入之儀八前日手紙を以御給人番所へ申達。尚又研屋并掛御目付賄之儀八御壹所目付へ申付之。

但、當時御目付賄無之研屋斗宜遣事。

も望次第差遣事。

連名書判

七月

朔日

一今朝例刻御禮被爲請之。

一法性院樣御靈前御代拜御城代列座中之相勤則申上之。

一勝壽院樣御靈前御綱月ニ付御隱居樣御代拜同役共相勤之。

三日

一來ル六日夕ゟ同七日朝迄。寂靜院樣御施餓鬼并九日夕ゟ十日朝迄淨岳院樣、光澤院樣御施餓鬼、
雖又輪光院樣、智性院樣御附施餓鬼被仰付候段淨安寺和尚相招謁之。

一右ニ付御用掛左之通被仰付候段申渡之。

一御臺所奉行壹人御用掛申渡畢而御料理方貳人御臺所奉行同道於席申付之。

一(案)御吟味方申合壹人相詰候樣申渡之。」

一右ニ付每之通御臺所小役之者差出尚又給仕子供之儀申遣候樣御臺所奉行へ申渡之。
但子供差遣候節ハ御持之者差出先格也。

小賄　壹人、　椀方　壹人、　坊主　壹人、　椀方
助中半三人、　使茶番　貳人、　人足、助中半、町夫年頭共　五人。
但以前者左之者共も罷出。

(案)下臺所　味噌屋　坊主ハ兩人、　椀方兩人。
前栽　壹人　雜用并小使。」

一右ニ付町夫年頭共五人差出候樣御町代官江申付之。

一右ニ付御布施目錄御書方江認申付。其外出僧江之目錄御張紙等者書役認之。

一御番頭江手紙左之通。

以手紙令啓上候盆中御燈籠香足輕兩人例之通御差出相成候此段得御意候。以上。

七月三日

但以前者御施餓鬼ニ付表門番足輕貳人被差出候樣申遣候へ共御取縮中ニ付相止。」

六日

一明日御禮刻限伺之事。

一今夕ゟ寂靜院樣御施餓鬼有之候ニ付同役申合壹人相詰。但、相詰候同役大目付以前ハ御齊非時
頂戴候得共近來御取縮ニ付被下無之。

七日

一七夕之御禮例刻被爲請之。尤御中小生以上也。

一今朝御施餓鬼相濟候上、於淨安寺和尚居間御施物左之通相渡。

竪目錄也

一銀　貳拾目　御導師
但御祐筆認之。以前者目錄臺ニ候得共寛政二年ゟ片木ニ相成。

一金　百疋
隱居有之節ハ右之通。

一銀　貳兩
後住之和尚有之節ハ右之通。

右何れも横目錄片木ニ書。

覺

一白銀　貳両　　香衣　誰
一同　壹両　　西堂　誰
一鳥目　三百五拾文　　國西堂　誰
一同　三百文　　平僧　誰
一同断　　同　誰
一同　貳百文　　道心　誰
（悉）但　小姓有之節貳百文也。
一同　百文ツヽ　　僕　何人
以上

覺

一銀　五匁　　西應寺
但　所化住職ニ候得共銀壹両被下。寛政十三酉七年七日和尚住職ニ付如斯。
一同　壹両　　天神院
一同断　　隨雲院
一同断　　西光寺
但　所化住職如斯。平僧ニ候得者三百文也。國西堂者三百五拾文也。
淨土寺代者筆頭ニ書。當リハ右三ヶ寺同様也。
一鳥目　百文ツヽ　　四ヶ寺僕　何人
以上

一御張紙左之通。

覺

一　臺所支配
一　料理
一　給仕

（御臺所目付　名前
御買物目付　名前
御料理方貳人　名前
御徒士子供　名前
但　誰悴　何之誰と書。
小賄　誰
椀方　誰
坊主　壹人
椀方助中半　三人
小便茶番ニ　貳人
人足助中半　三人
町火年頭共　五人

以上

但　先年者御普請目付、書役下臺所、御雜用、表門番、并下番、御露除之者、御前栽、其外御用檜物屋、八百屋、肴屋、桶屋等御張紙ニ載、御膏非時被下候事候得共御取縮中者右張紙之通相成。尚又外ニ下番頭御膏非時被下候事ニ候得共」

一右御張紙九日、十日御施餓鬼之節も相用之。

一御靈供献立御書方認出僧献立書役認候事。尤紙ハ中杉原也。但　近來御倹約ニ而大伴並相用候ニ付認習ニ而も何ぞ相替儀も無之、他之者見通と申場所ニ茂無之ニ付御臺所奉行差出候御献立直様。相用候様申渡。乍去先格消候而者如何ニ付御靈供献立ハ御書方へ一通見せ相認候姿ニ致候事。

一御小姓共七夕御四季施前廣御雜用へ申付書出認方端午之通。

一銀　貳拾五匁五分ツヽ　御小姓。　一銀　拾八匁七分貳厘　御小僧。

一銀　貳拾五匁五分ツヽ　御茶小姓。

八　日

一(馬)宗門御改來ル十七日ゟ罷出候ニ付年寄中ゟ沙汰申上、御目付壹人出役被仰付候段申渡之。

但、右出役者御目付出役之順を以申渡之。

一右宗門奉行御目付供人之儀申立有之候得者、中間頭江申付、尚又人馬申立書付差出候得者下知印達候事。但、右出役御儉約中相止宗旨手形差出候樣相成。」

一來ル十日輪光院樣、智性院樣御附施餓鬼被仰付候段和尚相招相達御施餓鬼料左之通相渡之。

一　御附施餓鬼料　白銀　貳枚

但、御一方樣銀壹枚、御二方樣ニ付如斯相渡之。

九　日

一今夕ゟ淨岳院樣、光澤院樣御附施餓鬼有之、同役申合壹人相詰。

但、相詰候同役大目付以前者御齋非時頂戴候得共近來御取縮ニ付被下無之。

十　日

一今朝淨岳院樣、光澤院樣并御附施餓鬼迄無御故障相濟候上、相詰候同役於和尚居間御施物相渡左之通。但、九日、十日御二方樣之御施餓鬼ニ付御施物貳通認之相渡。尤淨安寺一堂切也。

覺

一銀　拾枚　御導師　香衣　誰　銀壹両被下古行事ニ有之。

一鳥　目　三百文ツヽ　西堂　誰

一同　貳百五拾文　國西當　誰

一同　貳百文　平　僧　誰

一同　百文　道　心　誰

一同　五拾文ツヽ　儀　誰

以上

一今朝證眞院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤之。

十二日

一今朝寶林院樣御靈前御代拜右同斷。

十三日

一両役給仕子供并御書方へ手習御勘定所手習等罷出候子供江鼻紙代被下。尚又輕きもの格別出精且ハ手奉行等罷出候面々御酒代等被下、高之儀者難相定、手習給仕、子供者前々ゟ三拾目也。且、茶給仕仕罷出候子供之内、親相果御扶持方斗之者罷出候得者五拾目被下之形有之、太田兵左衛門、末光茂助幼年家持ニ而茶給仕罷出候節、五拾目ツヽ被下之、其外御勘定所江罷出候子供年頃ニ相成御用ニ茂相立候得者段々増方被下之。文化六、七、八之日記委細ニ有之、但、近年左之面々江茂鼻紙代被下之。

御料理方見習　武器方勤。

一両役茶給仕、御料理方見習者大概四年目ゟ五拾目高被下之。尤御勘定所手習御書方、手習武器方ハ初年貳拾目、年數ニ從ひ増方被下候事。

一両書役部屋住之局御宛行御斷中者御酒代名目五拾目ツヽ被下候事。

一明十四日淨安寺御參詣相伺、御參詣之旨被仰出候得者御供觸例之通申付。尤惣御靈屋御參詣也。尚又淨安寺へ案内手紙差遣。

但、例月定式之御参詣日ニ者宗門手紙不遣御延引相成候ヘハ手紙差遣不申中間寺浄安寺御参詣、文化十四、文政二。

十四日

一今朝浄安寺御参詣惣御霊屋御拜礼也、御参詣御延引相成候而も御代拜ハ無之。

十五日

一今日御礼無之。

一([illegible]) 出生御為御祝儀御小様方ゟ御肴差上候事。但、若殿様ゟ一折其外御小様方ゟハ御惣合也。右何れも御使御用人。」

十六日

一([illegible]) 宗門奉行御目付明日ゟ出役ニ付今日御前江被召出、正月之通。

一濵之市御桟敷懸御用掛御普請奉行壹人、御目付壹人申付。

一右ニ付小奉行弐人御普請奉行申立候ニ付其筋へ申付候事。

一右御桟敷掛以前者入札ニ申付候得共、近来右貸札相極置。

一御桟敷番中間弐人掛御普請奉行申立候ニ付名指以中間頭江申渡之、

但、御桟敷掛入札ニ申立候ニ付申付之。近例也。

小奉行　弐人。　増小奉行　四人。　大工　壹人。　中半　弐人。

御桟敷番之儀別段不申立中半共ヘ兼爲相勤之、

右者弘化四年ゟ右之通相成。

右御桟敷番江相勤候中半ヘ昼飯被下候様相成。嘉永戌年八月相極。

文久元年辛酉七月廿三日濵之市御桟敷御用掛被仰付候者江左之通被下置候段相極候、御普請奉行并御目付濵之市御桟敷御用掛被仰付候向江此節ゟ爲濵賃奉行江三斗御目付ヘ弐斗被下置。尤是迄御参詣有之節斗候下・来候濵賃者以後相止当年ゟ右之通規定相成候之段年寄中江申聞之、

廿五日

一松盛院様御霊前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

廿九日

一明日御礼刻限伺之書。

一明日御城下町人共御礼被爲請候ニ付廊下橋張番所御目付申合壹人罷出候様申渡之。

一右ニ付立番足軽両人月番者頭江手紙を以申遣之。

以手紙令啓上候明朔日例之通御城下町人共御礼罷出候間廊下橋張番所立番足軽両人毎之通御申付可相成候此段得御意候。以上。

七月廿九日

一右ニ付廊下橋御門入手紙差遣、

一明日法性院様御祢月ニ付浄安寺御参詣之旨被仰出御供觸申渡。

一明朔日松榮山近正大明神御祭礼之旨被仰出候得者御供觸申渡之、

一右御祭礼ニ付福壽院罷越被致執行候様手紙を以申遣。尤御参詣有之節も申遣、尚又御臺所方例之通罷越候様申渡之。

一右ニ付御路除奉行申合壹人罷越候様申渡之。

一御留守中年寄中御名代拙者共者例年御祭禮奉行壹人ツヽ罷越御留守中者廿八日福壽院へ申遣筋々江も申達之。但　年寄中壹人役之節ハ御用人供廻り左之通。

御持　徒士　口控　騎馬　自分若黨　御持老人　沓籠、鑓、長柄傘　挾箱中半　草り取　合羽籠　中半

御持　徒士

同　中半　〆拾三人。

但　痛有之節ハ同役を以年寄中へ相願、駕ニ而罷越。口控与沓籠三人御馬役江可相達処駕四人ニ相成候ニ付中間頭江相達。〆十四人ニ相成。

御家老供廻左之通。

一御持　四人　一自分若黨　壹人　一同草り取　壹人

一道具持　壹人　一駕　四人　一傘持　壹人

一挾箱持　壹人　一合羽籠　貳人　一茶辨當　壹人

一奉馬御控　貳人　一沓籠　壹人　一坊主　壹人

〆貳拾人

七月中

一盆中水向料書出御勘定奉行差出ニ付淨安寺者納所江相渡。久松庵常明寺、本光寺ハ町御代官江相渡之。尤年寄中下知印唐候暮御齋米も右同断。福壽院ハ御齋米斗、水向料者無之事。

一貳石　淨安寺　一九斗　久松庵

但　貳石五斗之處五斗減如斯。

一三斗　常妙寺　一三斗　本光寺

（明治二巳年七月ゟ此手數廢、會計ゟ書出を以申立。）（書入）

一飼葉江小奉行屋敷預ゟ申立有之候得者御者頭江申遣事。

一澁香御用掛御普請奉行壹人御普請目付壹人前以申付。猶又小奉行申上有之。其筋へ申付搗立出來候上、書付差出。

天保度ゟ

一壹番澁　何但

一貳番澁

但　高之儀年々増減有之澁柿壹斗ニ付ためし左之通。

壹升五合四勺　二度目　壹升六合

但　澁香之儀天保之度ゟ諸上納物取立掛出來、右之面々取扱候樣相成候ニ付御普請方江懸り被仰付無之事。

一鮎切時候書付下市村庄屋ゟ御臺所奉行を以差出候ニ付其頃合罷越候樣御料理方壹人御用掛申付候事。尤是者御徒士ニ而も御目見格ニ而も御臺所奉行一同申渡候事。尚又御料理ニ而見習之者有之節ハ壹人申付差遣事。

一年寄中於御勘所四代官勘定被承候節三日目御使被下之。前以御小姓頭へ申達御近習ノ内壹人御使罷越御口上申含遣之為御請被致登城則申上之。

但　以前者右御使被下候節左之通被下候事先格ニ候得共寛政年中御儉約被仰付候節ゟ相止。

一　鰻まんぢう　八拾　一　燒まんぢう　五拾

一常まんぢう　五拾

一文化二、三月九日、嘉永元、九月三日四代官勘定於大書院被仰付殿様被成御聽右之節、同所御居間御
襖両方へ開中江御簾かゝる。
但、殿様被成御聽候者一日跡、両日者御勘定所也。此節分以前之饅頭被下有之。嘉永六丑年分増
貳百六拾ニ成。右饅頭五文之餅、安政年中分三百ニ相成。尚文久元酉年八年寄中三人ニ相成候
得共、矢張三百也、尤万延元申年并文久二戌年ハ諸色高直ニ而餅類小く候間貳文増七文之饅頭
ニ申付之。

一(朱)左之者共ゟ年々新米献上有之、暮至被下もの有之。
一櫟木村、　又衛。　海老毛村　冨右衛門。　同村　金助。
久保村　半次郎。　畑田村　甚右衛門。

八月

朔日

一今朝例刻御家中并御中小姓迄御禮被爲請。畢而御城下町人并御番醫師共御禮被爲請之。御内禮
禮御言葉被下候外年始之通。尤前以御禮罷出候名前書付御町奉行差出之。
但、表一同御禮之内、近來庄屋共忰も罷出候ニ付行司之表正月之通之者有之候得共御禮之順
并披露之様記之左之通。
一同御禮之内、壹番
庄屋忰并平醫之者共与披露。

同　貳番
御城下町生石、敷原、勢家之町人東五ヶ村組頭与披露。尤此内江八醫師も申上來之處、今
日病熱ニ付不罷出。依之醫師之分相除披露申上之。

同　三番
表御用達並之者共与披露。

一法性院様御祢月ニ付淨安寺御参詣御延引候へハ年寄中御代拜被相勤之。
一右ニ付御隠居様御代拜同役共相勤之。
一今日松祭山近正大明神御祭禮ニ付御参詣御供御中小姓六人御目付壹人御供六人、其外圓壽寺御
参詣之通也。同役御先江罷越於御茶屋御神酒頂戴御酌御刀番之者相勤之。且又御参詣之節萩原
村庄屋牧村庄屋村々へ罷出御目付披露。
但、文化丑三月朔日淨岳院様松祭山江御社参御家督後初而御参詣ニ付太刀馬代御進献左之通、

奉献
御太刀　一腰
御馬　一疋
但、馬代銀壹枚
以上　御名實名

一右御参詣無之節ハ御名代年寄中被罷越御祭禮奉行同役壹人罷越供廻り四月之通福壽院御堂所方
例之通。但、御参詣不被成候段被仰出候得者同役當番ゟ年寄中被仰合。
御名代被相勤候様御意之趣申達、其上ニ而誰相勤候旨被申聞候得者其旨申上之。

八　日

一濱之市三日御名代御城代列座中於御前被仰付之。尤前日同役共ゟ手紙差遣。五半時登城候様御
　被之節之通。但、御留守居年寄中ゟ被相達之。
一濱之市中火之元觸年寄中被相渡候上、支配方へ相達之。
（注）但　以前者大目付相頼支配方へ相達之。
　且又御家人内芝居見物例年之通町御代官所ニ而紙札受取候様年寄中被申聞候ニ付支配方へ相
　達之。
一濱之市番船飾鐵炮、貳挺弓數之儀御船方ゟ申立有之候ニ付鐵炮革袋御右頭江申遣弓數を御持小頭
　立申付之。
一同斷遣貳本幷へ申遣。但、右番船之儀、文政之度ゟ相止。
一浜之市御持之者相詰候火消番所入用之品々左之通御立有之候ニ付筋々へ申渡之。
　壹行燈　　壹ツ。　　高張提灯　　壹張
　疊　　貳枚　　幕　　壹張
　細引　　十筋　　鎖　　拾挺
　陌子　　貳挺　　鳶口　　拾挺
一濱之市火事之節御持火消番所江生石、駄原両村ゟ壹人駈付之者被申付候之様町奉行へ申達之。
　但、右番所用心高上提灯壹張申立有之候ニ付相渡之事、蠟貝壹ツ大納戸ゟ火事羽織貳ツ御納戸
　ゟ相渡之。」
一御普請方ゟ左之通申立候ニ付御鐘挙行へ申達、若之儀ハ大納戸ゟ差出候様申渡之。

一三ツ道具　　徳多小屋入用
一幕　　内貳張御持数用、壹張十人番所渡。
一屏　風　　御持数入用、大納戸ゟ差出候様。
一御紋付幕　壹張　　十人番所入用、大納戸ゟ差出候様。
一長小頭放生會出役當用羽織御馬役ゟ申立候得者御持小頭江申付馬差出候事。
一左之通番付前廣金蔵院ゟ差出候ニ付筋々へ申立之。
年寄中ゟ御在城年ハ盆前共ゟ前刻手紙差遣於御前被仰付委細ハ前々有之。
　一御名代　　但、来月十四日午ノ下刻生石御持小頭壹人上下ニ而右同斷。
　一御神馬　三疋　　但、口付拾貳人羽織ニ而小頭壹人上下ニ而右同斷。
年寄中ゟ
　一警固衆　六人　　但上下ニ而右同斷。
御普請方御目付へ
　一羽織　拾　　但、長柄持拾人分小頭壹人羽織ニ而還御之節一ノ坂迄。
御馬役へ申付之
　一御馬　六疋　　但、坊中騎馬之分。
同斷
　一御　鞍　五口　　但、替裏共。
右者放生會来ル八月十四日御神事毎年之通御借被下候様被仰上可被下候。以上。
　　何七月　　白原山別當　金蔵院
　　仲御代官宛
此番付ハ七月中ニ差出候得共、猶又御用ニ付留置。
右之外御供屋敷破損等有之節ハ竹縄歟萱等金蔵院ゟ願出其筋々へ申付候事。尤願者下知印居差

返候得者御普請方ゟ相渡候事、猶又濱之御殿御假殿等損候節も右同断、下知印いたし差返候事。左候得者先々ゟ相渡。此分ハ年々ニ寄増減有之。

一御名代其外出役之面々入用之品々并中間人数書付申、立之上、筋々へ申渡。

御納戸

一若　當　羽　織　五ツ
御臺所へ
一箱　辨　當
同
一坊　主　壹　人
御普請方
一若　黨　笠　六ツ
同
一看　板　十四
同
一赤　合　羽　十四
同
一沓　籠　壹　荷
右御名代之分
一御　貸　馬
一合　羽　籠
右御看頭之分
一御　貸　馬
一合　羽　籠
右大目付」

中間頭
一中　間　拾四人
御臺所
一面　通
同
一茶　辨　當
御普請方
一中　間　笠
同
一青　染　合　羽　六ツ
同
一合　羽　籠　貳　荷
御馬役江
一牽　馬　壹　疋　但弘化二、八月ゟ
一中　間　三　人
一合　羽　笠共六ツ
一中　間
一合　羽　笠共六ツ

一御　貸　馬　貳　疋
右御町奉行
一供　人　四　人　御目付四人分
(朱)吟味方出役之節
一中　間　三　人
一四季施
蓮會所出役御中小姓
一中　間　貳　人
一合羽笠共
同所出役御徒士縁廻り壹人ツヽ
一中　間　壹　人
御持之音火消廻り
一合　羽　持　壹　人
出火之節室町御銀札場御目付供人
一欠　員　貳　人」

一濱之市御目付出役之儀御目付共伺出候ニ付組合名前書付を以相伺候上、一同召呼申渡。年寄中江も書付差出。尤十一日ゟ出役也。

濱之市御目付

㊀　何　誰
(朱)一同　貳　人　銀札場御目付両人分。」
一貸　羽　織　貳　ツ
一四季施
一合　羽　笠　壹　ツ

以上

㊂ 同 誰
㊁ 同 誰
㊃ 同 誰

右之通貳番ニ而組合也。尤御目付御人少ニ而代役入候節ハ前以御目付代被仰付候段御徒士頭一同申渡候上、本役一同召呼申渡肩番代認事。

一(略)室町銀札場泊番御目付代御徒士両人、御徒士頭一同申渡之。

一濱之市火消廻り御持之者六人名前書付を以小頭江申付候事。

一濱之市御銀札場御目付出役ハ別段不及沙汰。」

十日

一證眞院様御霊前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

十二日

一寶林院様御霊前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

十三日

一明十四日五ツ半時之御供揃ニ而濱之市八幡宮被遊御参詣候段被仰出左之通御供觸申渡之。年寄中へも相達御小姓江も申達之。

一御中小姓　十人　但近來惣供ニ相成。

但御供番之御中小姓壹人召呼申達之。

一御醫師　壹人

一御目付　貳人

但壹人召呼申渡候得者御手廻共江も申付候也。

一御徒士　十人　但近來惣供

但御供番御中小姓ゟ御徒士番所へ相達也。

一中押御持　両人

小頭江申渡

一中間共

中間頭江申渡

一割籠戈領　足輕貳人

中立有之候上、月番者頭江以手紙申遣。

一押籏之者　四人

御籏奉行へ手紙を以申遣濱之市限四人。

一御町奉行へ御参詣之儀及沙汰。

一御臺奉行へも右同断。

一御馬役江も　御普請方

一列座衆三日御名代被仰付置三日之内、御参詣有之候得者其日ニ當り候御名代不及旨御意之趣申達、尤登城無之節ハ以手紙懸御目度候間登城被致候様申遣登城之旨彼方前ニ當番同役罷出不及御名代旨御意之趣申達之。但御延引之節も以手紙懸御目度段申遣之。

一年寄中壹人被罷御跡乗同役壹人御先江罷越候同役供廻り之儀筋々江相達人數者十四日之處ニ有之。

但、附人足輕者年寄中之分直様着頭江被及沙汰同役共并御醫師付人者付年寄中へ差出候得者彼方ゟ者頭江被及沙汰候事。

文政十一戊子年八月十日

一 濱之市御参詣之節御供廻服忌之儀御代官ゟ以金藏院江承合候處濱之市者假殿之儀ニ付不苦旨申聞之。

十、四日

嘉永元年之形

一 殿様今日五ツ半時御供揃ニ而濱之市八幡宮江御参詣御出掛御支度御羽織袴被爲召同役壹人御跡乘壹人御先番御家老大押被罷越、御先馬貳疋嶋田頭對之御道具御先挾箱貳御長刀爲御持御中小姓御徒士惣供ニ而御中小姓供鑓九本爲持供挾箱四ツ御目付兩人、委細者行列帳ニ有之ニ付畧之。行列帳御目付差出候ニ付前日入御覧。

但、天保三辰年御参詣之節、御中小姓供鑓三本挾箱八ツ也。

一 御先番同役御供揃前御先ニ罷越着服羽織袴供廻り左之通。

附人足輕 兩人　自分若黨 壹人　内證膺足輕 壹人　但、足輕人少ニ付御持申付之。

道具持 壹人　傘持 壹人　挾箱持 壹人　自分草り取 壹人

合羽籠 壹人　駕之者 四人

一 御跡乘同役肩衣袴着用供廻り左之通。

附人足輕 貳人　自分若黨 壹人　内證足輕 貳人　足輕人少ニ付御持申付之。

道具持 壹人　挾箱持 壹人　自分草り取 壹人　合羽籠 貳人

傘持 壹人　口控 貳人　沓籠 壹人

一 御家老大紬肩衣袴供廻り左之通り。

附人足輕 三人　自分若黨 貳人　内證膺足輕 貳人　道具持 壹人

挾箱持 貳人　草り取 壹人　傘持 壹人　合羽籠 貳人

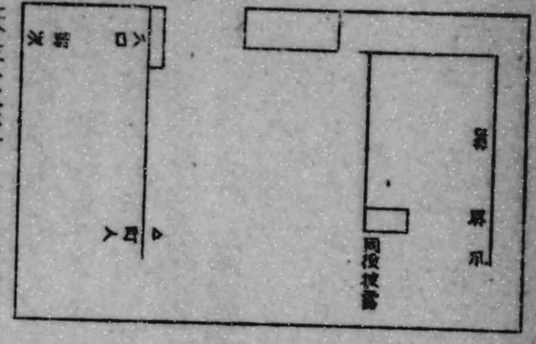
口控 貳人　沓籠 壹人　駕之者 六人

一 殿様御棧敷へ被爲入候上御簾下ル。御棧敷入御之節御先番之同役肩衣着用御棧敷前猿戸内砂利ヶ壹間半程小廻内爾向江罷出其節供人無之。

一 御中小姓御徒士立留之儀伺出候付此節者、船番所莚會所等無之ニ付小嶋辺番所江幕打廻し候段申渡、尤昨日御普請目付へ及沙汰置。

一 御臺所焚出賄之儀例之通被下候様御臺所目付申出候付生石村江申付置候付町奉行へ掛合候様申渡。尤昨日町奉行江も及沙汰置。

一 町人共御目見書付并社役書付町奉行差出候付則入御覧御目見被仰付同役兩人ニ而披露其節肩衣着用獻上物折壹ツ与町人罷出候場所左之通。



堀川町　仁助
掛屋　平吉
生石庄屋
駄原庄屋
府内庄屋
千手堂庄屋
松末庄屋
惣宿老
但　御目見之節差上物
折壹ツ宛

一町人共差出候折左之通被下之。
一折　貳ツ　御小姓共
御小姓頭へ相達。
一同　壹ツ
御供原頭江相達御近習番加り候へ者貳ツ。
一同　貳ツ　御目付御徒士
御目付へ相達。
一御近習江御酒被下候段御小姓頭江相達之。

一濱之市御目付両人右同様之旨召呼申達之。
一御普請奉行同御目付右同様之旨召呼相達之。
一右御酒被下用意之儀御臺所目付へ及沙汰。
一神輿御立之注進有之候上、御供揃申上之。　秡川江御打迎被遊御出候也。御打迎無之節八年寄中御名代被罷越。
一神輿御着之上神前江御供物相備候而雅樂主御棧敷へ罷越御參詣此段申出候旨町奉行申聞候付御供揃申付。猶又御前江茂申上長御上下御小サ刀御供揃候上、御參詣之節同役貳人麻上下半股立ニ而御供御中小姓御目付御徒士不殘御供此節御棧敷御上り場ゟ神前迄薄縁敷神前江眞菰敷有之候上ニ御着座相濟候上、御幣御頂戴之節御平伏相濟御歸。
但、御歸之節、金藏院出仕有之候得者天氣相之御意有之委細者文化十三丙子年日記ニ有之候付図面爰ニ畧之。
一御歸被遊候上、長御上下之儘、社役被爲請其節同役両人交々相詰。
一社役相濟候上、祇園之税所御棧敷へ御禮として罷出税所与御意有之。
一御膳被仰付相濟御酒之節、御家老同役両人御盃被下置。尤一同罷出順盆致し候之事。
但、今日御參詣者朝御精進ニ而御小辨當迄御精進仕立社役相濟候上、御膳より奥類被召上候事。
一御膳御殘被下左之通、尤何れも御棧敷ニ而被下之。
一年寄中　一同役　一御小姓頭　一御町奉行　一御醫師
一「朱勤番者頭　一大目付」
但、近來右例通被下。

一同役共社役相濟候上、肩衣ニ相成。

一御酒相濟御供揃申付暮六ツ時分、濱之市御立六半時分益御機嫌克歸御年寄中同役共一同御前ニ罷出。

一年寄中同役共於御機敷一紙目錄を以、御看献上御小姓頭江相賴差上之。

一年寄中者惣押駕ニ而被罷越候儀も有之供廻リ書付被相渡候上、夫々江申付候事。

一浜之市御參詣者御打物供鑓三本御先馬有之行列左之通。

町廻△ 町廻△ 御厩別當 御扣壱人 御控壱人 御先馬 口控壹人 口控壹人 同

沓籠 中半壹人 同 中半壹人 御先箱 御先箱 御箱之者 手代共三人 貳張弓 中半壱人

嶋田頭 嶋田頭 御道具之者 手代共三人 △御徒士 △御徒士 同同同同同同同同同同同 ○ 貳拾人 貳拾三人 當時惣供

寸鑓 大身 御道具之者三人 御長刀 中半 手代共貳人 ○御目付 ○御目付 御御中小姓 御中小姓 同同同同同同同 大概十八人位當時惣供

陸尺 御駕之者 助 六人 貳人 御箪リ取 御傘 御箪リ取 貳人 御床机 御日笠 同助 貳人 ○御挾箱 ○御挾箱 御箱助 三人

御箒箱 同助 壱人 御茶辨當 坊主壱人 人足壱人 中半壱人 小使 中半貳人

○口控 口控 壹人 壹人 御牽馬 沓籠 中半壹人 御持 御持 供若黨 供若黨 供若黨

又者 又者 又者 同同同同同同同同同 供鑓 供鑓 供鑓 供挾箱 同同同同同同同同同

御桐油箱 中半壹人 押 押 中挾箱 中半壹人 ○合羽籠 同同同同同同同同同 中半手代共 十五人

押 押 弓張 壱ツ △若黨 若黨 若黨 ○口控 口控 騎馬 御用人 若黨 若黨 草リ取 傘

鑓 挾箱 沓籠 合羽籠 同 △若黨 △若黨 △若黨 ○口控 ○口控 騎馬 武者駕之節も有之駕ニ而罷越候得者牽馬有之。

若黨 御家老 若黨 同 草リ取 同 傘 鑓 挾箱 挾箱 沓籠 合羽籠 同 町廻 町廻

合 △此印 ○口此印 ○此印 高張 袖箱 提灯

十五日

一今日御禮無之。

一鐵炮口留之儀年寄中被申聞候付支配之面々鐵炮所持之分鐵炮奉行江捻相納候樣筋々江申渡候事。
但近年左之ヶ所江相達之。
御小姓頭　御近習番　御徒士頭　御中小姓

廿四日

一大智院樣御称月ニ付例刻淨安寺御參詣。

廿五日

一松盛院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

廿七日

一淨岳院樣御称月ニ付例刻淨安寺御參詣

廿八日

一今日例刻淨安寺御參詣。

一濱之市延市被仰付候節、左之面々召呼延市被仰付候旨申渡之。
御普請方　濱之市
御目付　御目付　御臺所　御馬役　中間　「宗」御持小頭、
御船奉行　銀札場御目付」

廿九日

一明日御禮刻限伺之事。

八月中

「宗」一當月末宗門御改宗旨奉行御目付鄕中ゟ罷歸ニ付、御前江被召出當番披露。尤前日相伺候上、
明日御前江被召出候間可罷出旨召呼申渡之。
但當日ニ至御不例之節、御前へ可被召出處御不例ニ付不被召出太儀ニ思召候旨御意之趣於席
奉行御目付一同申渡之。」

一長岡御奉行被蒙仰初而同所へ御着之御方へ御歡御使者給人中之内年年寄中ゟ被申付大概八月末
九月上旬之出立也。
右御奉行大阪御着候へ者御役人共ゟ申來其日積ニ而出立之事也。

一右御使者出立前日御前江被召出當番披露。

一右御使者御口上書入御覽候上、御使者江此方共ゟ相渡。尚又御目錄共ニ相渡之。
（文久三亥年ゟ御大名樣方御勤之由ニ而大村樣被參仰候由來從公義御、者不相見追而取調
御手續規定記置度）（付箋）

覽

一何ノ何守樣　千鋼折、御樽代三百疋
於江府公方樣、大納言樣益御機嫌克被成御座奉恐悅候將又貴樣弥御堅固被成御着珍重存候右御
歡以使者申達候付目錄之通致進覽之候。

○以上

一何ノ誰樣

於江府公方樣大納言樣益御機嫌克被成御座奉恐悅候將又貴樣弥御堅固今般被成御交代珍重存候右御歡以使者申達候。

○

以上

月　日

但御留守中者○之處江此敍左衛門尉ゟ被申付越候与認之。

一右御進物御目錄金三百疋并御着之儀ハ長崎豐後屋理右衛門江預金之内を以取斗候樣。尤干鯛無之節ハ鰯一折右両樣之内宜取計候樣申遣依之御目錄も干鯛鰯両樣相認相渡之。理右衛門江之書狀左之通遣之御使者附人江爲差遣候事。

但右目錄臺所共一所ニ宜取計旨申遣之。

近年御預金無之ニ付御使者之用心金之内ゟ御進物代金相拂候事右ニ付豐後屋江御進物御世話賴入候。尤委細御使者之者へ申含置候間御承知被下候之樣申遣事。

一筆令啓上候何之節候得共弥無御別条御暮珍重存候然者此節其御奉行樣御交代ニ付御歡使誰与申者被差立候間宜御世話賴入存候且又御奉行樣江進物鰯干鯛両樣目錄爲致持參候間右両樣之内臺所共宜敷御取計可被下候賴入存候尤委細使者之者へ申含置候間御承知可被下候右可申述如此御座候。恐々謹言。

月　日　　達名書判

豐後屋理右衛門樣

狀箱ニ入油紙色青原菱掛差札豐後屋理右衛門樣与認御方名前片書なし。

御献上鮎并御殘御進物帳面左之通鮎切罷越候已前相認惣積之書付御臺所目付へ相渡。猶右才領足騎貳人出府被申付候樣前廣月番之者頭江手紙を以申遣差立者鮎切揃候ゟ日間次第見合申遣大概九月中旬迄也。

一粉糖漬鮎　五拾　御献上

一同　拾　餘分

合六拾

一同　貳拾宛　御老中

但、御側御用人有之節御老中並之。

合

一同　斷　若御年寄

合

一同　斷　御側

合

西御丸

一粉糖漬鮎　五拾　御献上

一同　拾

合六拾

一同　貳拾　御老中

一同　斷　御側御用人

一同　断　　若御年寄
合
一同　断　　御側
合
一同　　貳拾　　御配餘分
御隠居様
一粉糠漬鮎　五拾
一塩鮎　百
一白干鮎　三拾
一澁鯵　壹升
一切鯵　壹升
一子鯵　少々
　　御献上通
殿様御用
一白干鮎　拾五
一澁鯵　壹升
一切鯵　壹升
一子鯵　拾五
大奥様御用
一渋鯵　貳升
一塩鯵　五拾
奥様御用
一渋鯵　貳升

一塩鮎　五拾
江府年寄中へ御表年寄中ゟ
一塩鮎　貳拾
福島屋へ年寄中ゟ
一糀漬鮎　貳拾
鴻池伊助へ年寄中ゟ
一同　貳拾
土井能登守様御家来
土塚鐵次郎被下
一塩鮎　拾壹
一粉糠漬鮎　貳拾
一同　断
京都御諸司代
大坂御城代
（御献上御廃相成候ニ付年寄中福島屋、渡被下者大廻りを以爲差立候事）（付箋）

一芙容之間御役人様方寛政二ゟ相止。
一御献上御荷揚差立九月初旬中旬迄之内、
御献上者九月十月也、鮎之儀ハ少々趣有之御届難相成。
一鮎無之節ハ引替御献上左之通。
寶暦十二年四月二日出便ニ申來日記有之。但表紙内紙ニ有之。
一干鯵　百　　御献上
但、骨抜ニ而ひらき

一同　五拾ツヽ　御老中
但、骨抜ひらき
一同　三拾ツ、　若年寄御側
一文政五壬午年鮎御献上御荷物豫州大洲沖ニテ破船御献上不相成候相済引籠極ル。
一灘之市八幡御参詣半御行列安永七戌年八月十八日之形左之通。

合紋　▲高挑灯　△家中高挑灯
■箱挑灯　□同箱挑灯
●丸提挑灯

附廻　▲結黒羽織　握々緋御文付　御持之者花色紋付羽織
●火縄二、御持小頭　御鉄炮　同同同同同同同同同

附廻　▲御紋付提挑灯
霞青染金御紋

手代同　至薬箱　手代　合羽籠　同
御長柄之者　木綿羽織花色御紋打運角　同　長柄　同

△若党　同　鑓　□□　扣
△若党　同　鑓　手代　□□　扣　騎馬　御用人　吉田与八郎　若党　草リ取　傘
馬添　引馬　小付　挟箱　御持鑓二本　御用人持　御挟箱　御用人代　挟箱　持鑓

挟箱　皆籠合羽籠　同　▲●▲　持弓小頭　黒結羽織挟之紋所　御紋付　御弓　同同同同　御持之者花色紋付羽織
挟箱、

手代　惣金瓢　中間布押羽折　霞青染　御矢箱　御長柄　木綿羽折花色御紋打遣　手代　同　合羽籠　同

△若党　同　鑓　手代　□□　扣　騎馬　御用人　山田武助　若党　草リ取
△若党　同　鑓　□□　扣　若党　□　傘

挟箱　皆籠　合羽籠　同　▲▲　中間小頭　黒結羽織紋所　黒結羽織角打遣　御長柄　同
挟箱　御長柄　木綿白黒立筋羽折

同同同同同同同同　合羽籠　同　△若党　鑓　□□
若党

御扣　騎馬　鑓奉行　人見喜太夫　□　草リ取　挟箱　皆籠　合羽籠　柏子木　中間
御扣

結黒羽織紋書　御扣　御奉馬　■同皆籠中半　同
■別当　御扣　同

御先箱　手代弐人　御堅傘　手代弐人　■御鳥毛対鑓　手代
御先箱　御臺笠　■御対鑓

植交大身御鑓　手代　御鐵炮　形付神色帷子花色木綿袖なし羽織　手代　■　御二張弓　押羽織布紺　中半

手代　御鐵炮　さらさ袋

同　断　押羽織布　御刀箱　黒羽織　嶋田頭とんぼむすび

同　中間　手代　弩　飄　沼御紋中間　■　御刀筒　手代　御對鑓　中間

御對鑓　中間

手代　■　自分羽織　御徒士　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　■　御鑓寸鑓

■　御徒士　同　同　同　同　同　同　貳拾壹人　同　同　同　同　御鑓大身　手代

御長刀　手代　▲　自分羽織　御目付　●　袖増挑灯　御　御小姓　壹人　御中小姓　八人　御近習番　壹人　御中小姓　八人　御小姓　壹人　■　陸尺八人

中間　▲　御目付　●

■　御草り取　御拿持　御挾箱

■　御床机持　御草り取　■　御挾箱　手代　中間　御簑箱

御茶辨當　坊主壹人　人足壹人　中半壹人　柏子木　中間壹人　小使　壹人　■　口控　口控

御牽馬　■　口控　口控　御牽馬　沓籠同　●　押　押　付人足軽三人　又　又　又　有　有　有

供鑓　供鑓　供鑓　供中間　供中間　御桐油箱　中間　供挾箱　供挾箱　同　同　同　同　同　同　中間

合羽籠　御中間　同　同　同　■　同　同　同　同　同　同　同　手代　同　●　●　押　押　弓裏御紋付

△　△　鐵炮　同　貳張弓　對鑓　對鑓　手代　刀筒　口　口　若黨　若黨　若黨

同　持鑓　口　口控　口　口控　騎馬　御家老　王置但見　若黨　同　若黨　同　口　傘　草り取　沓籠　挾箱　挾箱

合羽籠　同　同　町廻　町廻　御目付

右之通爲心得写置之。行列振付嘗古等前廣申付之。

一　奥女中八幡宮参詣之節、奥附差添罷越錠口番貳人遣之。弁當之儀ハ御堂所へ申付之。夜分芝居見物等ハ検敷者御普請方中半拵ニ遣之、町奉行江も女中共芝居見物罷越候之段相達之。

一　花火御出之節左之通相達之。

一御小姓頭　一御中小姓　拾人也　一御目付　貳人　一御徒士　拾人
一御醫師　壹人　一押籏之者　一御普請方　御棧敷拵之儀　一御臺所　一中間頭
一御町奉行　一割籠支須　月番者若頭江　籏奉行
但、御打物爲御持御中小姓供鑓貳本。
一右之節御跡乘御用人肩衣着用騎馬也。
先徒士　三人　長柄傘　鑓
馬　脇　武人　挾　箱　合羽籠　二荷
一御先江罷越候同役十四日御參詣之節之見合。
一年寄中御誘引御棧敷ニ而年寄中同役申合御肴一折一紙目錄を以差上之。奥女中罷越候得者奥掛同役罷越。
一此節勤番之面々江御殘被下ハ無之被下ハ十四日斗、其外ハ無之。
一御供之面々御菓子被下茂無之。
一御棧敷ニ而後段被召上、夫ゟ花火御見物所へ御出、御見物相濟毎も花火頭取之者共御棧敷江御機嫌伺罷越下去花火場所取込ニ候得不罷出翌日御城江罷出。
一花火相始候前花火掛之面々御見物所向川端江銘々挑灯爲持罷出。右相濟御見物所ゟ流星三本上ヶ夫ゟ始ル。
一濱之市角力御出御供廻リ花火之通リ。

九月朔日

一今朝例刻御禮被爲請之。
一法性院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

二日

一朝今日宗門御届御便差立候事。」
一重陽御四季施書出差出認方ハ例之通。
御小姓　銀　御小僧　銀　女中　銀

八日

一明九日重陽之御礼刻限伺相濟候上、年寄中へ相達御小姓頭江も相達之。
一俊明院樣御命日ニ付圓壽寺御參詣前日御供觸申渡之。

九日

一重陽之御禮例刻被爲請之御中小姓以上也。
一智性院樣御称月ニ付御禮過淨安寺御參詣。

十日

一證眞院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

十一日

一明日淨安寺御參詣御供觸例之通淨安寺へ案内手紙差遣。
以手紙致啓上候明十二日寶林院樣御称月ニ付其御寺へ被成御參詣候段被仰出候此段爲可得御意如斯御座候。以上。

九月十一日

十二日

一今日實林院樣御重前御称月ニ付御参詣即刻御歸若御延引被仰出候節ハ年寄寄中御代拜也。御隠居樣御代拜月番御用人。

但以前者御内佛御安置ニ付御称月之節ハ和尚被爲召御非時被下御施物白銀壹両當時無之。

「宋」十三日

一來ル十五日山里神田明神祭禮ニ付福壽院へ手紙遣候得共當時相止候付爰ニ畧之。」

一若宮春日祭禮ニ付御目付出役之儀伺出候付左之通名前組合書付年寄中へも差出之。則相伺候上、一同召呼相達之。

若宮祭禮御目付

十四日夜　何ノ某

十五日　何ノ某

春日祭禮御目付

十八日夜　何ノ某

十九日　、――――

以上

一右祭禮ニ付社奉行御持之者壹人差出候樣小頭江申渡之。

一右御持合羽持壹人、小頭申立候付差出候樣中間頭江申渡之。

十四日

一明日御禮刻限伺之事。

十五日

一今朝例刻御禮被爲受之。

十六日

一見樹院樣御称月ニ付淨安寺御参詣。

「宋」十七日、十八日之内

觀音御供養并東照宮御天守下弁天御祭禮之儀相止居候付爰畧之。」

十九日

「宋」今日春日祭禮、御在城年ハ御小姓頭御代参被仰付候段申渡。尤前日相伺候上ニ而申渡附人足軽貳人騎馬也。道具挾箱鑓。

但長門守樣御代右之通之處、御隠居樣江戸表御出生神田明神御氏神ニ付右御代参無之當時も無之ニ付爰畧之。」

一今日流鏑馬罷出候厩之者へ鳥目百文ツヽ被下之。

一右御祭禮ニ付神宮寺ゟ申立之儀ハ前々之通當月初旬頃町奉行を以指出候ニ付夫々被申付候事。

一春日祭禮ニ付神宮寺ゟ左之通申立有之。

一流鏑馬　貳疋　馬具供

一右　鞍　七疋分

右御馬役江申渡之。

一馬口取　六人　但十七日ゟ

右中間頭江申渡之。

一神輿御供　貳人　上下着
一長柄　拾本
右年寄中ゟ被申付之。
一長柄持　羽織　拾
右御普請方へ申渡之。
一社奉行　壹人　上下着
右御持小頭江申渡之。
右之書付町奉行ゟ年寄中へ差出其上ニ而此方へ差出候付右之通夫々江相達之。
一右御祭禮ニ付神宮寺ゟ御供米壹俵書付差出候ニ付御勘定奉行江相渡。倉付之上、裏書致し年寄中へ差出判形相濟此方判形いたし町奉行へ相渡之。
一右御祭禮ニ付御高振米貳斗之處文政元戌子年九月ゟ壹斗ニ相渡。
廿五日
一松盛院様御豊前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。
廿八日
一今朝港安寺御参詣。
廿九日
一明日御禮刻限何之事。
一明日來秋御参府御供被仰付候付御小姓頭御小姓御醫師御中小姓御臺所目付まて五ツ時御用有之候間登城候様呼廻状差出小使持廻り也。

九月中
一長崎御使者相濟罷歸候ニ付御前江被召出候事を被露也。
一御献上鮎御荷物中旬迄之内差立候事。
一當月由原御参詣五月之通。
一ニ御檢見罷出候前日大目付御勘定奉行其外勤人御小姓ゟ御徒士格迄御前江被召檢見掛御目付も一同被召出年寄中出席披露なし。
一御網掛被成御出候得者廻状差出左之通。
明日四半時之御供揃ニ而東辺御網掛被成御出候段被仰出候各御供被仰付候間網御持参、塩九升御門外江御揃可被成候。以上。
月日　當番姓名
御者頭　殿も様も無之名前斗
御家中　下ニ引下ケ認之。
御中小姓
但御出無之勢子斗之節者以前ハ御家中へも此方ゟ廻状差出候處近頃御家中江ハ年寄中被相達此方支配之分ハ此方ゟ差出。
右寛政十三年九月廿六日相認之。」
一御網掛方角次第御休所之儀其郷之御代官江申付之、弁當持之儀ハ中間頭江勢子茶弁當用意之儀御臺所目付へ申付之。
一御網掛場所見分之儀ハ一両日以前事馴候御中小姓之内、壹人申付遣候事。其外左之所へ相達之。

御出之節者廊下橋前揃之事。

御小姓頭　御醫師　大次医師壹人罷越候様相達若怪我人等之節之手當ニ付綱不持休所ニ而控候而も宜、又ハ跡ゟ罷越候而も宜事。

御近習へも

御普請方　御臺所目付　御持小頭　御供目付

休所之儀

中間頭　躍方貳人　町郷調役昼休之儀、町奉行　大目付

但嘉永元年者御勘定所勤人壹人是ハ損目之主へ被下有之候付爲見分罷越候様被仰付尚々御番御用并御痛之方者御名前之下江御記御順達被成候。以上。

明日四ツ時御供揃ニ而東辺御網掛被成御出候段被仰出候各御供被仰付候間、網御持参塩九升口御門外へ揃被成候廻状早々御順達廻リ止ゟ御返却被成候。以上。

月　日　當番名

御右頭　様書

御給人

御近習番　殿書

御中小姓

御中小姓　殿書

當番名になし。

右同断。

但支配之分ハ御揃可有之候御返却可有之候。

一列座豪登城有之候得者席江罷出申達。登城無之節ハ右廻状差出。

一御目見浪人江者大目付相頼相達之。

尚々何之處昼休弁當ハ普請方へ御指出可有之候。以上。

明何日五時塩九升江揃ニ而年寄中網掛被罷越候間網御持参御越可有之候、尤御番御用并痛之方ハ名前之下江御記可有之候廻状早々御順達今晩迄廻留ゟ御返却可有之候以上。

月　日　御用番名斗

御小姓江ハ御小姓頭ゟ相達候様申渡之。

御近習　壹通也。

御祐筆　殿

御中小姓　殿　壹通也。

上書　網掛廻状　御近習番

御祐筆

同　御中小姓

但貳度目廻状ハ引込并痛之分名前除差出之。

一右ニ付左之所へ相達之。

一　昼休其郷之御代官へ　一　茶弁當　御臺所目付

一犬　中間頭へ　引　鳥持　網持　茶辨當持　勢子辨當

網掛當番之節、仲ヶ間頼合ニ而昼之内者罷越候而も不苦様相成リ尤先元ニ而夕方早目ニ引取其節罷越候同役江其趣相断候様相極尤表方御給人も昼之内者頼合ニ而罷越候付右ニ准之候。

十　月

朔　日

一今日例刻御禮被爲請之。
一法性院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。
一今日同役之内於御來秋御參府御供被仰付之。
「家 但、年寄中先年ハ壹人ツヽ御供被仰付候處御取絡ニ付寛政中ゟ相止。
一看頭中壹人御參府御供被仰付候段年寄中被申渡之。」
一支配之面々左之通來秋御參府御供被仰付候段御供之同役申渡。

御小姓頭　一同
御小姓　一同
御中小姓　御小姓頭差添
御医師　一同
御祐筆
御臺所目付

十日
一澄眞院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。
十二日
一寶林院樣御靈前御代拜右同斷被相勤。
十四日
一明日御禮刻限伺之事。
一文照院樣御命日ニ付例刻御供揃ニ而淨安寺御參詣。
十五日
一今日御禮例刻被爲請之。

廿五日
一松盟院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。
廿八日
一今日例刻淨安寺御參詣。
廿九日
一明日御禮刻限伺之事。
「家 御檢見往歸ニ付大目付御勘定奉行并勤人之面々御逢之儀相伺候上、明日被成御逢候間五ツ半時登城候樣大目付御勘定奉行奉行一同席江相招相達之。
尚又支配勤人之面々ヘハ右同樣之趣御勘定奉行ゟ申通候樣申達之。
但、歸之上、御逢之儀者町組勘定相濟寄せ目錄差出候上ニ而御逢之事、尤年寄中茂出席。
文政十一子十一月五日
御檢見往歸ニ付大目付御勘定奉行御逢之儀已來年寄中ゟ相達支配勤人之面々ハ此方ゟ御勘定奉行相招申達候樣年寄中判談之上、相渡之。」
十月中
「家 寒干鯛之儀御用肴屋ヘ申付候事。
但、近年ハ壹前屋御用御勤。已前ハ吉田屋壹前屋隔年相納入札也。
一右御用掛御料理方武人御臺所目付一同申渡候事。
一右御献上帳面取調御臺所目付江書付相渡之。
一寒干鯛　御献上

一同　五枚　余分
合　拾五枚

一同　五枚ツヽ　御左中
合

一同　三枚ツヽ　若御年寄
合

一同　三枚ツヽ　御側
合

西御丸

一寒干鯛　御献上
拾枚

一同　五枚　●餘分
合　拾五枚

一同　五枚　御左中

一同　新　御側御用人

一同　三枚　若御年寄
合

一同　三枚ツヽ　御側
合

御隠居様御用

一同　五枚　御献上通

一海干　三束
一塩辛　壹樽
但壱升入

一塩甘鯛　拾壹本

大奥様御用

一寒干鯛　三枚
一海干　貳束

殿様御用

一塩甘鯛　五本
一海干　五束
一塩辛　壱樽
但壱升入

福島屋被下

一塩甘鯛　貳本

松本平八郎被下

一塩甘鯛　貳本

鴻池被下

一甘鯛　貳本

太田主殿様被下

一海干　三束
一塩甘鯛　大本

一右寒干鯛御献上之儀天保十三寅年分御頼ニ而御止方御引替御品御献上有之。

十一月

朔日

一當日之御禮例刻被爲受之。

一法性院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

七日

一明八日中嶋稻荷祭禮福壽院江手紙之儀當時相止候ニ付畧之。」

十日

一證眞院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則上之。

十二日

一寶林院樣御靈前御代拜右同斷。

十四日

一明日御禮刻限伺之事。

十五日

一當日之御禮例刻被爲請之。

十八日

一例年之通光西寺七昼夜見廻之儀被仰付被下候樣町奉行申出候付町代官召呼申渡之。

廿三日

一牧村久松庵江例年之通歳暮米被下候段目錄町御代官へ相渡之。

「朱但、以前者御持使壹人小頭江申渡合羽持壹人中間頭江申渡之。文政三庚辰年格別御省畧御改

正ニ付御持使相止町代官へ相渡候樣相成。」

表

米五俵

以前者大杉原貳枚重ニ相認御持使相止候之節ゟ中大貳枚重横目錄相成書後認之。

裏

表書之米壹石五斗　牧村久松庵主へ被下候間可被相渡者也。

十一月　御用人共

御代官宛

右書出御勘定奉行へ相廻倉付之上年寄中へ差出印形相済、裏書ニ此方共印形いたし町御代官江相渡之。

廿五日

一松盡院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

廿八日

一今日例刻淨安寺御參詣。

一芦刈御用掛被仰付候段御普請奉行、同御目付一同召呼申渡。

但嘉永三戌年十一月十四日別段御用掛不被仰付一同申合見廻罷越候樣相達之。尤小奉行ハ是迄之通貳人申付之御普請奉行へ相達之。

廿九日

一明日御禮刻限伺之事。

一御山方ゟ枝打ニ付村々御加勢夫申立有之候得共年寄中へ此方共ゟ右書付指出之。年寄中ゟ郡方

江被仰付候事。

十一月

一寒入當月ニ候得者寒入御便、當月差立、委細土用之處有之御一家様方御機嫌伺之書状差立之儀者其時之振合次第當時者、

太田様之奥様

一寒入御機嫌伺二日目也。是又土用入之節之通。

但 増澤虎之丞壹人ニ而中奥ニ而御機嫌相伺。但暑中も同様也。

一寒中ニ付日田御郡代様江之御書此方ゟ添状致し毎通しふき御目録臺共年寄中書役共迄爲相廻候事。

但 御進物御方ニ而取扱候分ハ是迄之通用意いたし候事。

右者是迄此方共ゟ小頭江相渡來候処年寄中御勘定所ゟ茂目録等御遣甚混雜致し候ニ付此節右之通相極候尤才領持人等者此方ゟ申付候事。

御進物 御樽代三百疋 御肴一折 但料ニ而百疋折掛水引かけ。

右三ヶ條都而年寄中ゟ取斗候事。但、御書江致附状手附迄相廻候事。

一筆令啓上候甚寒候得共弥無御別條珍重存候然者其御郡代様江左衛門尉ゟ書状一箱并目録之通被致進覧候付雇脚足軽差立候間例之通宜御取斗頼入存候此段可申述如斯御座候。恐々謹言。

月 日 同役 連名

廣瀬源兵衛様

上包 油紙蓑掛

一御留守中者右御進物年寄中ゟ被差立、御書者江戸ゟ到着之姿ニ而此方ニ而日合考爲相認町便ニ差立拙者共ゟ附状致し候事。尤其節ハ御状箱ニ此方共添油紙ニ而一所ニシフキ差札ニ日田豆田町廣瀬源兵衛様与相認此方名之片書ニ松平左衛門尉内与相認御代官江相渡候事。

一日田御郡代江歳暮一種三百疋目録年寄中ゟ差立之。目録臺者沙汰之上、御臺所へ申付之。

（左ノ付箋何レニ入ルカ）

（御猪狩御出之節左之所へ

御小姓頭大次御持小頭但御鉄炮持之義御便目付御挑灯之義も御臺所但御茶辨當坊主之義中御御代官、但御休前尚又御道筋松明用ニて茂、中間殿、右御歩行之節ハ大次へ連なし、御奉行江者年寄中ゟ被達事。）

十二月

朔 日

一當日之御禮例刻被爲請之。

一法性院様御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

二 日

一宗門御届御便差立候事。

三 日

一支配之面々年寄中勤書差出候様左之ケ所へ申渡御医師江者御薬貼数相調書出候様申渡事。

御書請奉行 同御目付 御露除奉行 御馬役 小船奉行

御供目付 御徒士頭 御臺所目付 御持小頭 中間頭

但 御留守中者無之。

九　日

一明日證眞院樣御祢月ニ付淨安寺御參詣被仰出御供觸申渡之。

十　日

一今日例刻淨安寺御參詣若御延引候得者御代拜年寄中被相勤之。

一右證眞院樣御祢月ニ付御隱居樣御代拜同役相勤之。

十二日

一寶林院樣御靈前御代拜御城代列座中被相勤則申上之。

一明十三日御煤取ニ付例之通定輕被差出候樣月番者頭江手紙を以申遣。

一右ニ付中間共例之通差出候樣中間頭江申渡之。

一右ニ付御居間奥共被被致候樣福壽院へ以手紙申遣之。

以手紙致啓上候明十三日御煤取ニ付毎之通御居間奥共御祓御修業可被成候入用之品々御臺所ゟ御受取可被成候。以上。

十二月十二日

福壽院

以手紙令啓上候明十三日御煤取ニ付例年之通定輕共御指出可被成候此段得御意候。以上。

十二月十二日

御者頭月番名前　樣

御留守中

一十三日御煤取ニ付十二日寄合。

一來正月三日例年之通御松囃子被仰付候段町家へ被申渡候樣町奉行へ申達候事。

但、御松囃子可被仰付之旨年寄中ゟ同役共當番を以相伺被仰付候節ハ當番ゟ御町奉行相招相達之。

十三日

一今日御煤取相濟候上、當番同役麻上下着用登城御祝儀申上之。但、當番斗例刻登城後段之節ハ平服。

十四日

一明日御禮刻限伺之事。

文久二戌年十二月ゟ

一出雲大社ゟ御札守差上候段御奉行差出候付左之通御目錄被下御祐筆へ爲認出來之上、御雜用江相廻同人ゟ取斗以來年々被下御規定。

一金三百疋

（昇進御足米等御順年御廃ニ付此度手續相除、此外之手續都而附錄ニ委敷ニ付其度ニ纏メ置度事）（付箋）

十五日

一今日御禮例刻被爲請之。

廿二日

一年中出精之面々明日御褒美被下候付呼廻狀差立左之通。尤御目見格迄一統相認之。

御用之儀有之候間明廿三日五半時登城可有之候、以上。

十二月廿二日　當番名

御近習

何ノ某与下段ニ書、殿書もなし、御中小世臣師此内ニ入。

御中小姓
御代官
御畳所目付
御徒士
御目見格

一御小姓頭御給格御醫師江ハ切紙差出。
御用之儀有之候間明廿三日五半時登城可有之候。以上。
十二月二十二日　當番姓名
切符
何之誰殿
但、御鐙奉行ゟ相勤候御小姓頭ニ候得者左之通。
以手紙令啓上候。御用之儀有之候間明廿三日五ツ半時御登城相成候此段得御意候。以上。
十二月廿二日

一御小姓頭
御家老嫡子相勤候得者致書様御登城相成候与認。
以手紙致啓上候御用之儀有之候間明廿五日五ツ半時御登城可被成候此段爲可得御意如此御座候。以上。
十二月廿四日　當番姓名
王置貢様

一御目付以上悴被召出候得者左之通切紙差遣之。
御用之儀有之候間明日悴召れ五半時登城可有之候。以上。
十二月廿二日　當番姓名
切符
何ノ誰殿

一御近習番悴貳人扶持被下御中小姓勤見習被仰付ハ當日御用ニ而切紙不差遣前日手紙を以及内沙汰。
但、御宛行附候得者悴召れ登城候様切紙差遣候事。

一御中小姓悴御徒士ハ召出候節も右同断之事。

一御目付悴御徒士被召出候節も右同断之事。

一御取立之者有之節ハ筋々ゟ請取渡申付候事。
御持ゟ御徒士被仰付候へハ前日小頭召呼明日御用有之候間誰儀御徒士頭へ引渡候様申渡御徒士頭江も請取、明日席江召連候様申渡之、御持ゟ御目見格ニ被仰付候得者小頭ゟ御目付へ引渡候様以下右ニ准取候事。

一支配之内、前髪有之悴両席給仕御書方見習貳者御勘定所手習等罷出年頃ニ相成前髪執候儀ハ前日明日前髪爲執召連罷出候様親々へ申渡候事。

廿三日

一今日年中出精之面々御褒美御取立御足米御目録等被下山奉行迄於御前被下同役披露御意相濟御取合申上之。御徒士以下御目見格迄於席御徒士者御徒士頭差添、御目見格者御目付差添御勘定所手代御勘定奉行一同御目見格之并出方同断、御目見以下ニ者候得共既小頭者席江召出御目録

相渡差添なし。但、御堂所御用相勤候町人共八百屋権兵衛物履其右衛門堂日銭七ツ折出。其外手札。

但、御徒士時鼻紙代被下御徒士頭差添無之事。

御留守中、

一御張美被下、御普請方出精之者御雑用其外中間中半共。

一御留守中列座中へ手紙左之通御餅搗ニ付小番之内人明廿四日被差出候様月番者頭江手紙を以申遣事。

「来ル廿五日例年之通御餅搗ニ付小番行司人明廿四日被差出候様月番者頭江手紙を以申遣事。」

一御留守中頭附小姓壱人御堂所へ泊番中付候間其旨被相心得候様列座中へ申遣。尚又廿五日暁七ツ時分御門出之儀も右同人江申遣之。

一御在城中御門出之儀、八廿四日ニ此方共ノ廊下橋江手紙を以申遣之。

一御留守中列座中へ手紙左之通當番之列座宛。

以手紙啓上候明廿五日御餅搗ニ付今暁小姓壱人御堂所泊番申付候尚又明暁七ツ時分御門出入且又御堂所へ火を下ヶ候間例之通可被仰付与存候此段為可得御意如斯御座候。以上。

十二月廿四日

一今日来正月射初廻状差出之。

口上之覚

来正月各射初雑兵法遣初可被成。

御覧者御定ニ御座候日限之儀者追而可申遣候廻状早々御順遣廻り留ノ衆廿五日迄之内、誰方へ御差戻可有之候。以上。

十二月廿三日　　御代列座

御家中　　殿書也。

口上之覚

来正月各射初雑兵法遣初可被成。

御覧者御定ニ御座候日限之儀者追而可申遣候廻状早々御順遣廻り留ノ衆廿五日迄之内、誰方へ御差戻可有之候。以上。

十二月廿三日　　同役連名

御小姓頭　　殿書

御小姓ニ茂

但、列座格之御小姓頭有之候得者御家中之通文言相認。

文言同断

御近習番　　同役連名　苗字書

御祐筆　　殿書也　同役連名　苗字なし。

文言同断

御中小姓　　殿書也。同断。

口上之覚

来正月御手前方射初可被成御覧者御意ニ候日限之儀者追而可申遣候廻状早々御順遣廻り止ノ衆来ル廿五日迄之内誰方へ可被差戻候。以上。

十二月廿三日　　同断

御代官
御普請所目付
御徒士　　殿番也。

一御目見以上人附初之儀大目付へ申達。但近年年寄中ゟ被相達。」

一大番組御書院之儀御目付へ申渡之。

一御目見格之者附初之儀御目付へ申渡。

一御弁之者立附並出候儀小頭江申渡、尚又矢見御持之者并御用意之儀是又小頭江申渡之。

一御通御除之儀御番頭方へ申渡之。

一御勘定所手代附初之儀御勘定奉行へ申渡之。

一矢取中間之儀中間頭江相達之。

廿五日

一松姫殿御輿請御代弁御城代列座中被相勤則申上之。

一今日御謡初。

廿六日

一御星祭日付文代として廿八日乗船ニ付今日御前江被召出當番被露御取合申上之。但當年者文代時節不定いつニ而も同様也。然而御目付以上之者他所へ罷越候故江戸江被遣候節ハ御目見被仰付候先例也。御目付格ニ而も同断。

廿八日

一御家中之面々歳暮之御禮例刻被為請之。「永文久二戌年ゟ相止。」

一御例過寂静院様御命日ニ付浄安寺御参詣。

一御持之者弓鉄砲々引請候段年寄中へ相達之。

廿九日

一歳暮之御禮浄安寺福壽院罷出。

一今夜歳暮ニ付年寄中御城代列座同役共登城御禮申上之。列座格者同役共相濟候上ニ而罷出諸事例之通。

嘉永元年之例。

但歳暮之御禮年寄中同役共御前へ罷出候處御手自御看目録左之通被下之。

一金百疋　年寄中　一南鐐壹斤ツヽ　同役共。

但同役嘉助儀當病元日ニ罷出候處御看目録被下之。

一年寄中御熨斗目被下候處御取縮ニ付御看目録如斯被下之。

一朔元日浄安寺御参詣相伺候事伺済、同寺へ案内手紙差遣。

一今夜堀川町掛屋平吉、西新町高田屋市左衛門例之通町御代官召連罷出御目見被仰付御玄関ニ罷在。殿様御中小姓番所迄御出當番被露。

但此節御徒士御取立之者共御通掛御目見被仰付御徒士頭召連御用人席向江罷在當番何ノ何某与被露。

一歳末之為御禮圓壽寺罷出取斗方左之通。

一圓壽寺歳末御禮登城之節ハ御代官召連郡奉行月番之者罷出同役當番へ只今圓壽寺罷出候段申聞候得者直様諸下橋御門入達之、御門入之上、列座報被上候口ゟ揚リ候而其方共席へ圓壽寺壱人

飛出只今登城仕候段相届之道々御目見有之節献上着綿白本差圖壽寺分郡奉行受取此方共へ相渡被置御目見有之、若御不快ニ而御禮不被爲請候節者、同役當番分郡奉行へ沙汰有之候得者郡奉行分御代官江相達候得者御代官分圖壽寺へ申渡之。尤、御禮不被爲請候得者献上物御代宮分此方共江差出之。

但、圖壽寺御禮登城之儀前廉何成無之當日當城先格也。尤罷出候上ハ郡奉行分圖壽寺例之通前末御禮登城仕候段御家老方へ申達若不快ニ而御禮不罷出候節ハ前日御家老方へ右之段那奉行分相届之。

右之通文政七甲申十二月相極。

一一 来正月年始ニ付巳田長崎并御隣端飛脚足軽月番者頭江手紙を以申遣之。尚又入ヶ銀相調、年寄中へ申達御帳箱今日相渡置ニ日出立也。

一一 来ル二日分五日迄廊下橋張番所出役御目付申合相勤候様申渡。尚又立番足軽貳人御者頭へ申遣事。

但、立番足軽御目付分不申立此方分直ニ御者頭へ申遣事。

一 御留守中

一 今夜ニ入納物等有之御中之者御臺所へ出入致候事有之其趣列座中へ申達御在城中者廊下橋江此方分以手紙申遣之。

一 御子様方被成御座候得者歳暮御祝儀御着一折差上候事。」

十二月中

一 寒入當月ニ而も十一月ニ認有之通。

一 御献上寒干鯛御荷物文領足軽両人前廉御者頭江申遣置候事。

一 右差立年内立春ニ候得者廿八日乗船申付之。掛渡前日之事。

但、掛渡之上様子次第ニ而足荷被下候事。

一 節分之節御年男江鳥目五百文之手札御臺所目付へ相渡候事。

但、當府ハニ百文ニ相成尤御留守中も有之事。

一 御在城中御鴈樽洗入ヶ左之通御目付分申立之。

一一 酒 五 合 但壱挺ニ付

一 塩 壹 升

右下知印之上御能用江相下ル。

一一 京 大坂留守居記小豆當暮御町奉行江及沙汰事。

但、文化二丑年分相止、以前ハ海雲も差立候事。

一一 由原定夜燈油近年高値ニ付のへ銀之内被下候證文郡奉行指出候ニ付拙者共判形之上差返之。

但、右證文并新證文とも貳通差出御山方分出金相成候事。

嘉永二酉年十二月分

一 御取立方へ納候薪御臺所御用之薪直ニ百姓共へ爲持込候節廊下橋外御門無相違御通相成様手紙差遣候事。

一 神宮寺分左之通證文町奉行差出候付御勘定所江差遣候付之上、此方共印判致し相渡事。

覚

一 御藏米　　神宮寺

拾五俵

右ハ當何ノ年正五九月爲御祈禱料被下置慥受納仕候。以上。

何ノ十二月　　神宮寺

町御代官宛

御乘船一件

一船中粮米搗人夫御臺所目付ゟ申立有之候ヘハ町御代官江相達候事。

一御乘船前加子改之儀御船奉行ゟ申出候ニ付御吟味方并御目付立合改候樣申付之。

但御迎船之節も同樣。

一御乘船當日水打夫例之通差出候樣町御代官江申渡、尤前廣申渡之。

一御乘船之節御船場迄御刀番御中小姓兩人申付之。

一御手廻リ共朔望誓古出精ニ付御酒五升被下御供目付ヘ相達之。

一右ニ付御供目付ヘ御酒三升被下之近例。

一御乘船前日御船頭始梶取櫓之者迄御船奉行一同席江召呼御舟中隨分入念候樣申付之。年寄中席江も罷出之御迎之節同樣。

一御乘船當日住吉江御代參御小姓壹人被仰付候段御小姓頭江申渡之。御初穗五百文目錄御書方ヘ認申付之、附人足輕之儀年寄中ヘ申達挾箱持中半之儀ハ中間頭江申渡之。

一御隣端日田、長崎、日出、杵築江飛脚足輕之儀前以月番者頭ヘ手紙を以申遣。右入箇之儀年寄中ヘ申達御雜用江も受取相渡候樣申渡。

但、日出、杵築ヘ御乘船當日差立、杵築江ハ千鯛箱被進右箱之儀者前以御臺所ヘ申付之、持人中半之儀ハ中間頭江申付之、且日田、長崎、御乘船翌日出立、何しも御狀箱者前日小頭ヘ相渡

此方附狀有。

一杵築樣御着城有之候段爲御知有之節、殿樣御出府被成居候得者於江府被成御承知候御日合を以御書并千鯛被進候事。尤拙者共ゟ彼方御用人中ヘ附狀差遣。

右弘化四丁未年九月之例

右同斷之節、殿樣御幼年ニ候得者、御書不進江府ゟ被仰越候趣を以拙者共ゟ附狀ニ而千鯛被仰付候事。

右天保十二丑年十月之例

一御乘船當日兩表年寄中御城代同役列座格迄一紙目錄御着一折差上御目錄者御書方ヘ相賴御小姓頭を以差上之。尤御着代者知行高也。御供之同役者別段尤素目錄也。

一御乘船當日御城代列座中御前江可被召出哉相成候事。

一御乘船當日淨安寺、福壽院爲御暇乞罷出御前被召披露。

一御當日年寄中列座中登城御逢有之尤御城代も。

一御支度被爲召候上、年寄中御城代列座中同役列座格御小姓頭御醫師とも爲御暇乞御前罷出其節列座中同格迄御留守中泊番江仰付之。

但、濱之市ニ而も御名代被罷越候列座者不罷出直ニ罷越。

一御乘船當日年寄中同役御小姓頭御醫師迄湯漬賄申付給仕坊主。

一御當日殿中詰合惣賄申付候事。」

但、當時者兩書役其外臺所方斗ニ相成。

一御目付共公料火事番御城下廻リ申合相勤候樣申付御普請方御目付公料火事番申合相勤候樣申付之。

一御乘船前與入御小姓共袴地代百疋ツヽ被下之。
一御乘船前御藥差上候御醫師江藥數高ニ應御目錄被下之。貼數之儀取調書付差出候樣及沙汰候事。
一御乘船前日御前江被召出候面々左之通。

大目付　披露捨
「來御吟味方　披露ナシ」　但、御内目付ハ是迄之通壱人ツヽ罷出御買目付も壱人ツヽ罷出
「來御内目付　同　断」　候処両人ニ同罷出候樣文政五壬午年八月御歸城之節申渡之。
御普請御買物目付　同断

但、御普請目付御吟味方兼相勤候ヘハ右一諸ニ御前江被召出。

一御乘船當日御次御番組書付御目付ヘ相渡。御番組ハ書役取調候上、御右筆ヘ爲相認御目付代泊番之張紙者書役相認之。
一御徒士之者ゟ御玄関御番所請取候樣御持小頭江申渡尚又定番之者とも申合相勤候樣申渡之。御徒士之者江ハ引渡候樣御徒士頭江相達之。
一御乘船之節、御跡乘年寄中被相勤同役共例之通千貫松向江罷出御船場之儀者海陸日記ニ有之。
一御乘船前御船々御祈禱龍祥院ヘ被仰付御祈禱料鳥目壹貫文目錄町御代官ヘ相渡目錄ハ御祐筆認之。御札相渡四ヶ所左之通。

萬喜丸　観音丸　一葉水傳間。　錠傳間、　鯨船貳艘　假船三艘

一御乘船當日海陸両便差立、中國路ハ八日限船路之方ハ御先船江相渡之。
一御先船乘船之面々御乘船當日乘組候樣申渡候事。
一奥女中共御乘船當日直樣御用屋敷ヘ引移候樣奥掛之同役奥附之もの江申渡之。依之今晩ゟ直樣

泊り番相勤候樣申渡之。門番之儀ハ人足之内ゟ壹人指出候樣申付尤右引移之儀廊下橋御番所ヘ手紙を以申遣之。
但、御隠居樣御代者御留守中北之丸江罷在。
一御乘船相済御役宅廻勤候樣支配方ヘ相達之。

御參府御歸城共

一御乘船中舸子扶持儀廻し御船頭ゟ申立有之候付御吟味方壹人御供目付壱人下臺所立會候樣夫々召呼申渡。
一蓑崎小早雇舸子四人但、一日壹人八匁ツヽ、十日之間十一日目ゟ。

嘉永四辛亥八月四日

一廣瀬鎌吉當時此表罷越居候付今日御乘船爲御見立御船場ヘ罷出候ニ付御供之同役披露之。
一日出杵築御家老江之御書澁紙包ニ而無之御小姓頭差出候得者其儘飛脚足軽江相渡事附狀等一切構なし。

御歸城一件

一御歸城之節御迎船出帆之儀者御供之同役ゟ江戸御発駕之時節申來候得者頃合相考出帆申付候事御先船ニハ江戸ゟ大坂江申越候得者大坂ニ而廻船留置候事御船中粮米之儀ハ御臺所目付ゟ申立有之町夫江申付、下臺ニ而爲書候事其外御船中入用之品々ハ筋々ゟ申立有之節其筋ヘ申付候事。
一御歸城前御城内掃除大奉行御中小姓壹人申付之。掃除夫之儀ハ町御代官江申付候事。
但、御掃除掛御目見格之者壹人御目付ヘ相達候事右小奉行御持之者壹人小頭ヘ申付候事。
一御歸城前列手之通御居間奥共被致祓候樣福壽院ヘ手紙を以申遣。尤入用之品々御臺所ゟ請取候

樣申遣之。

一 御船場ゟ御刀番御中小姓貳人申付候事但、御刀番之者御先船ニ而罷下三日過候得者、其者御供勤三日ゟ内ニ候得者當所ニ而被仰付候御刀番相勤。依之前廣ニ相達置候事。

一 御歸城之節御船場江差出候足輕左之通前廣月番者頭江手紙を以申遣。

一 御具足才領　壹人
一 御掛硯同　壹人
一 堀川口見歩使　壹人
一 日出、杵築飛脚　貳人
一 日田、長崎　同斷
一 押　貳人

當時止」

此表御初入之節ハ干鯛箱貳ツ遣事、但飛脚之節壹ツ御徒士使壹ツ

一 中間共左之通中間頭江申遣之。

一 杵築へ御進物持中半壹人　但、杵築樣御乘船ニ付遣之　御同人樣兼而御乘船有之居候得者無之事。

一 御歸城前表奥御座敷御床御掛物活花之儀御茶道江申付之。

一 川口御着船之上御献立持參同役壹人爲伺御機嫌御船江罷越直ニ淨安寺御參詣可被遊哉相伺候事。

一 御上り刻限之儀ハ御供ニ而罷下候同役ゟ申來候上、御供觸尚又支配一統へ及沙汰候事。

御着發共

一 御歸城前御掃除相済候段、御掃除掛之者申出候得者武器餝之儀御持小頭江申付候事尚又御上之節、御持筒之者四人中押貳人申付候事。

一 廊下橋御番帳年寄中沙汰之上、御大工頭江毛引申付出來之上、トジ御持小頭江申付之。御番組書付年寄中被相渡候付御帳張紙共御祐筆認申付之。尚又御小姓番組大次并御中小姓番所張紙御玄関徒士貳人御番張紙書役取調下書御祐筆へ相渡之。御張紙爲認置其外所々御張紙等爲認置候事御

目付御徒士御供組張紙御料理方番組張紙御玄関番同斷坊主共番組張紙御目付泊番張紙ハ書役相認候事。

一 御着城爲御祝儀両表年寄中御城代列座同役列座格迄一紙目錄を以御着一折差上之。御祐筆へ相願、前以目錄認置差上候節ハ御小姓頭を以差上候事代錢ハ知行高割、但、御供ニ而罷下候同役ハ除之。

一 御城入之節、同役共例之場所へ罷出。

一 御跡乘年寄中被相勤候事御中小姓御徒士惣供也。

但　年寄中壹人役之節、同役共之内ゟ相勤候事。

一 御安座之上御熨斗差上之。

一 年寄中御城代列座同役列座格御逢之間ニ而恐悦申上畢而御小姓頭御醫師御目見申上之。

一 右御逢之節列座中泊番被成御免廊下橋御番帳相改前々之通御次江相詰候樣被仰付之。

一 御供ニ而罷下候同役ハ壹人罷出恐悦申上之。

一 御膳之節、御醫師御相伴可被仰付哉相伺候事。

一 御醫師共毎朝壹人ツヽ罷出候樣相伺候上ニ而申付候事。

一 同　年寄中同役御小姓頭御醫師御湯漬賄申付給仕坊主也。

一 殿中詰合惣賄申付候事但、先年者御賄鱠平付候得共寛政三ゟ汁斗ニ成ル。」

但、當時ハ両書役御堂所方斗ニ相成候事。

一 支配之面々御目付以上爲恐悦席江罷出其已下ハ廻勤御供ニ而罷下候面々御目付御徒士共一同罷出。

一 御玄関御番所御徒士之者へ引渡候樣御持小頭江申渡之。御徒士江ハ御番所受取候樣御徒士頭を以申渡尚又定番之者共申合相勤候樣御目付を以申渡之。

一御小姓頭泊リ番被仰付候節ハ年寄中ゟ被相達候事、尤助之者ヘ被仰付候之節ハ此方共ゟ相達候事。
但、御小姓頭壹人役之節此方共ヘ被仰付。

一淨安寺、福壽院罷出則御達有之。

一御着翌日左之通御前ヘ被召出。

大目付　御吟味方　御普請目付

但、大目付ハ披露捨其外ハ披露なし。

一御供ニ而罷下候面々今日ゟ直樣十日休被仰付候段申渡之。
但、御先船之面之面々着之日ゟ十日休御着當日御供罷出候付其分一日休延候之事御供ニ而着之者當日御供仕候得者同樣。

一御初入之節ハ沖之濱ゟ被爲揚御行列也。

一所々御番所張紙者着之面々十日休明候前日爲張之御目付ヘ相渡候得者、致差配坊主ヘ爲張候事御近習番但張紙者御小姓頭江相渡之。但近來ハ御目付ヘ相渡。
但、御先船ニ而罷下候面々十日休明之節求タ御張紙不出候付暫操番相勤候之樣大次當番ヘ及沙汰候事、尤殿樣暫御滯坂とかにて餘リ早着之御先船之節ハ先平之通、是迄ニ張紙ニ名前下禮之事。

一御目付以上廊下橋御門札相渡候事御門札御普請方ゟ差出候ニ付此方ニ而左之通相認印押御普請目付ヘ相渡候ヘハ同人ゟ夫々相渡之。

年号月日
○何ノ某者

○御用人（共）

已前者銘々同役共名前書印判之處、

一御留守中御徒士被召出未御目見不相濟御歸城之節、御船場ゟ御供罷出候儀不苦事、依之伺出候得者先例も有之候付御供罷出候事御中小姓も同樣也。但安永三午七月廿八日之処ニ有之。

一御歸城之御禮被爲請候段被仰出候得共左之ケ所ヘ相達之。

御小姓頭　御近習番　御臺所　御供目付　御持小頭
宗門奉行　鉄炮預リ。
但支配之内ヘ有之候ヘハ相達候事。

御医師　御茶道
是ハ御家中御礼之節ハ不罷出寺社斗罷出。　御床掛物花之儀。

御普請方　廊下橋御番所ヘ右宗内手紙差遣候事。
箱番所掛

一大次當時打込之操番ニ付御近習番之者當番ニ無之節ハ大次江相達候上別段御近習番江も相達候事、尤朔望之通ニ付朔望ニ出來候御近習番ハ罷出候得共御役所勤等之向者不罷出。

一御小納戸御荷物解足軽申立有之候得者、者頭江手紙を以申遣之。

御歸城之御禮。

一御家中并切符之面々ハ宗門奉行鐵炮預御普請奉行迄御歸城之御禮被爲請之。但大書院出御。
但、自分御禮有之面々ハ御禮前於中奥被爲請之。

一町郷中御禮之儀ハ正月御禮之通町人御内禮之者ハ御言葉被下之名前書付ハ町奉行郡奉行ゟ差出之

一右御禮被爲請候付殿中詰合其外諸番所麻上下候樣及沙汰候事。

一町郷中其外寺社御禮迄廊下橋外張番所ヘ御目付也人ツヽ申合出役候樣申渡、月番者頭江張番所

立帰足軽之儀略正月之通。

一御礼罷出候者相揃候上、表下橋御番所へ繰込之手紙差遣候、御目付を以繰込候義相違候節も相
尤前日ゟ右案内之手紙不差遣繰込之節斗手紙差遣之。

一寺社御礼罷出候者又正月之通。

但、由原金蔵院護國院之院室御額ニ付御會釋重小書院ニ而被爲請候先例有之候得共當時御手
狹ニ付於大書院御礼被爲受候得共先格ニ准外々ゟ席を進之罷出年寄中列座同役護國院与披露
御礼中者毎も、

一園壽寺大寺ニ被仰付格式重相成候付近頃登城之節、共廻リ左之通。

伴僧三人　駕脇乘祀烏帽子其外挾箱指傘共　拾五人前
右ニ付御中間御貸被下候様申出候儀も有之。
一同守ゟ御歸城御礼罷出候節先例も有之候付左之通拜借仕度之旨郡奉行書付差出候付判談之上願
之通申付其筋々ニ及沙汰。

一看板　拾五人前　一合羽籠　貳荷　一合羽笠共　拾五人前
一羽織、大小共五人前　一大小指　五人　一御中間　拾五人

一石川市郎兵衛手控写左之通。

文化十三丙寅年七月十一日

御歸城之御禮被爲請候節大目付御勘定奉行御普請奉行ハ先例不時ニ御歸城御禮御座候ハ者
御禮ニハ不罷出候。併ハ朔日重陽御禮日ニ御歸城御禮急有之候得者罷出候先格ニ御座候間
此段内々伺置候事。

御歸城御祝儀御料理被下一件

一明日御歸城之御祝儀御料理被下候段年寄中同役江當番相達之御小姓頭御醫師江ハ召呼申渡之。
右之節年寄中拙者共御小姓頭森上下着用御禮申上之。

一右ニ付御料理仕立之儀御臺所へ前以申付之事。

一右ニ付御徒士給仕七人御徒士頭江申渡候事。

一右ニ付御吟味方壹人相詰候様申渡之。」

一當日年寄中拙者共御小姓頭御醫師ニ汁五菜御料理被下之、年寄中席也。
但、當時御倹約中ニ付一汁三菜焼物付吸物壹ツ肴ニ種ニ相成。

一寶暦二年増田御左衛門病氣ニ付御料理被下候段御意之趣以手紙申遣候處太田政右衛門を以御礼
申聞之。

一両役病氣ニ而不罷出候得者御肴被下之。

年始御料理被下一件

一年始御料理年寄中同役御小姓頭御醫師迄被下之、前日其旨年寄中ハ席江罷越當番相達、同役同断御
小姓頭御醫師者召呼申達之。

一右ニ付御徒士給仕七人御徒士頭江申達之。

一御料理仕立之儀ハ前以御臺所江申付之。

一御茶迄被下候ニ付用意之儀御茶道へ申渡之。

一當日年寄中同役共御小姓頭御醫師迄於年寄中席ニ汁五菜御料理被下尤御茶迄被下之。
但、當時御倹約中ニ付一汁三菜焼物付吸物壹ツ肴三種御茶被下之。

一年寄中同役江御亟被下之御肴御雑煮相添申付之。
但寛政七年分御亟相止御手数斗被下之。
一列座格ニ而御小性頭取御料理番頂戴候得共御亟者不被下候事。
一今日御霊所方并御給仕之者賄申付候事。

御能御催一件

一今日晩六ツ時揃ニ而御能御催有之年寄中列座中同役列座格御小性頭御霊所両寺并見被仰付之。
但、来迎寺浄土寺拝見被仰付候ハ、廊下橋御門ハ其吉申達之両寺ハ一汁三菜肴吸物壹ツ宛ニ種被下之。
一御相手罷出候町人并拝見被仰付候町人御門入之儀廊下橋へ申達之。
一130 一 嘘子方之面々ハ御賄御酒被下之給仕足軽共町人共ハ御手廻リ給仕。
一 来迎寺浄土寺拝見相済町奉行召連席江罷出尚又町御代官同道ニ而年寄中并同役当番江御礼罷越。

浄安寺御入

一浄安寺御入之節ハ表門番足軽両人月番者頭江申達之。下番之儀ハ中間頭へ申達之。
一初而御入之節銀弐枚被下之一或御霊所方仕立罷越候事。
一支配之面々家作内拝借之儀御目見格方以下ハ御雑用方出以上ハ御勘定所方出ル。
但、近来（事項ヲ欠ク）
一御家老席内御旅館等有之節ハ御玄関定番方就方共当役立会以申開其上ニ而其筋へ取遣申付候事。
一文政十丁亥年両乞被仰付候付左之通福寿院方申立有之。

一御神酒　壹升
一御供米　壹升三合
一蠟燭　弐挺
一御肴　十二人
但 御霊所目付へ沙汰之事。
一鯨　弐級
但 御船頭へ右同断
一中間　壹人
但 中間頭へ同断

天保五甲午年十一月九日近境区相成居候付取極。

一年寄中同役共不快引込之節御尋御使左之通規定。
一年寄中ハ引込方初度御尋三日目弐度目、三日目之日方五日目三度目五日目方七日目其餘者見斗。
一同役共者引込方五日目、夫方七日目三度目十日目其餘ハ見斗之事。
但、御城代増澤虎之丞年寄中通御使被下之。嘉永六年分但書、以来ハ初五日目御尋ニ相究

安政四年二月

辰六月朔日

一祇園宮ニ而御祈禱被仰付御祈禱料白銀三枚御雑用へ及沙汰。
一列座中へ御番被下候節此方方年寄中（並出候事。」

府内藩年中行事

（終り）

第二冊豫告

高橋敬一筆錄

温故知新錄

福田葉城註約二百數十頁

四月中出來

高橋敬一はこれが爲從五位を追贈されて居る別府市亀川の有名なる勤皇家でまた同地の里正だつた、此「知新錄」は里正として全地方を中心とせる政治、社會、經濟其他各方面の記事、約四十年間――文政六年より文久三年に至る――のものを自ら筆錄せる貴重なる文獻で、明治維新の勤皇家の筆になる幕末地方史の好史料。

昭和十八年三月十日印刷
昭和十八年三月十六日發行　（非賣品）

編輯人　垣本言雄
發行人　三重野幸夫
印刷人　大分市若松通り四四四番地　平川一之
印刷所　大分市若松通り四四四番地　平川活版印刷所
發行所　大分市勢家本町七。四番地ノ一　大分史談會
取次所　大分市若松通り四四四番地　三重野書店

製本控

962 函	46 號	年 月 日
大分史談会叢書	第1巻	
		1冊
備考		

962
46